

---

# 超能力学園

蜜柑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超能力学園

### 【Nコード】

N0736W

### 【作者名】

蜜柑

### 【あらすじ】

近い未来の話  
人類が超能力を発見し使うようになっていた。人類の進化と云っていい。

しかし、それは若い間につまり中々高校生（10代から20前半）までつけないと、ちゃんとした能力を扱えない物だった。

更に能力を使えるものをふやすために学生に能力を身につける能力適性授業というのを少なくとも（中学2年生から）5年は受けなくてはならない。

唯一適性者が一番多かった日本に学園都市を建設し、能力開発の学校を多く設置した

主人公の一宮 守は今年、超能力適性高等学校に入学することになった普通の日常を満喫している高校生。しかし、ある事件のきっかけからその日から非日常になっていく。

## プロローグ（前書き）

どうも蜜柑です

温かい目で見てください

よろしくお願いします

色々やり方間違ってるかもしれませんがごめんなさい  
バカなんです。

## プロローグ

俺は一宮 守、中学を卒業し今年、学園都市内の超能力適性学園に入学することになった。高校に入るまでは学園都市の外で学校を過ごすのが高校生になってからは、能力スキルの実技が入るため一般人に被害が出ないために学生を集めているそして今日引越してきたのだ。俺が通うことになる学園は基本的に能力の高い連中が集められているレベルで言うと6〜8くらいだ。

能力はレベルで分かれている最低がレベル1で最高が10レベルまであることは、レベル1〜3はまだ能力を使えない物が多い4〜5レベルくらいで普通に使えるようになる。6〜8レベルは能力は自由自在に操ることができる9レベルはもはや天才といつていいほどだ。10レベルは未だ5人しか出ていないそうだ。

この学園には大人は人口の約3割で残りは学生だ。施設なども豊富で学園都市の外の暮らしとなんら変わらない。面積もまずまずである。

俺の住む寮は学園都市の一番南にある。学園は北方面のはずなのだが、どうやら何かの手違いで俺だけ生徒として数えられていなかったみたいだ。仕方ないので旧学生寮に行くことになってしまったわけだ。

ホントついてないな・まあ、仕方ないから俺はその寮に向かうことにした。

「やつぱり、結構遠いんだないぶ乗ってるのに未だ着かないのかな？」

今日学園都市に入って、自分の学園で入学式を済まし疲労がピークに、達していた。荷物などは先に寮に送られたらしい。向こうの間違いなので早急にやってくれた。そうこうしているうちに「次は「桜坂町」でございます。お降りの際は荷物など（ry）」のアナウンスが、かかった。

俺は「やっと着いたか」早く寮のところ行って休もう」と疲れ切った声で言った。電車の扉が開き俺は外に出た

## プロローグ（後書き）

どうも蜜柑です。

文章力なくてすみません

誰か読んでくれたら嬉しいです！できれば、感想もお願いします！

おかしなところとかあったら教えて下さい！できるだけ直していきたいです！

停電？（前書き）

どうも蜜柑です

またよろしく願います

できれば、コメントや評価などもお願いいたします

## 停電？

駅前 PM 11:50

駅前はこの時間帯でも明るく人もまばらにいた、その中には学生もちろほら見当たる。人がいて少し安心した。ぶっちゃけ夜の道を一人で歩くのは不安だ。言っておくが、決して怖いわけではない

（結構遅くなつたな。この道をまっすぐ行つたあたりみたいだ）

地図を再度確認して歩きだし数分が経って駅の明かりが遠くなつて人の声も遠くなつてきたころの時だった。急な立ちくらみが来た。なんだ？疲れてるのかな？と思つていたら、いつの間にか、周りの街灯や明かりが消えてしまつていた、さっきまでの人混みの音までも聞こえなくなつていた。

なんだ？！停電か？さっきまで聞こえてた人混みの音も消えたしなんだ？もしかして、消灯時間とか決まつてるのか？でも、街灯まで消すか普通……。まあいいかあんまり深く考えないでおこそれにしても、本当に何も聞こえないなまるで、人が消えたみたいだな。そういえば、今何時だ？守は、携帯を出してみるが画面は真っ暗のままだった。

あれ？充電切れてたか？さっき開いたときは、まだあつたような気がしたんだけど。

しばらく歩いてると明かりが見えてきたなぜかそこだけのようだが、そんなのは関係ないようやく明かりを見つけたのだから。

よかった。停電とかじゃなくて、ん？、てかあそこ学生寮じゃね？よかったやつと見つけたよ！。

でもなんか、寮ってよりも広めのビジネスホテルみたいな所だな。  
そんなことを、思いながら寮の扉を開けた

学生寮 1F ロビー

「おじゃましてーす。なんて、誰もいない・・・のかな？」

中は結構広く本当にのホテルみたいな所だな。でも、人が見当たらないな。もう夜遅いかもだから、上で寝てるのか？挨拶とかは、しなくていいのかな？てか、俺の部屋は何階なんだ？とか考えていると。

「あなた、誰ですか？」と、いきなり後ろから警戒していそうな声を掛けられた。声からして女の人のようだ。いきなりだったのでびっくりしてしまった。とにかく、まずは振り返って話そう。

「えーあ、えっと、あの」いきなり話し掛けられたのもびっくりするがそんなことより

なぜか、戦闘をするかのような構えを取っている女の子が、目の前に立っていたことが一番びっくりする。もしかして、めちゃくちゃ警戒されてるの？なんか、今にも向ってきそうな勢いなんですけど・

とりあえず話そう。

「えっと、ここって能適学園（超能力適性学園の略）旧学生寮ですよね？」

「え？あ、はい。そうですね。あーもしかして、一宮 守さんですか？」

「あ、そうです。すみません、遅れてしまって」なんだ？俺のこと知ってるのか？

「すみません！とんだ失礼をしてしまって。」態勢を直してお辞儀してきた。

「いえ、いいですよ。こんな遅くに勝手に入ってきた俺も悪いですし。それと敬語もいいですよ。」  
たぶん同じ年だろうし。

「そうですか？あ、えっと、私は、一之瀬いちのせ 空そらっていうの。よろしく」

「うん、こちらこそよろしく。もう知ってるみたいだけど俺は一宮いちみや 守まもよろしく」

「えっと、今日は、もう遅いから休むといいよ。部屋案内するね」

「ありがとう！」本当にありがたい、今日は色々あって疲れた。

学生寮 2F

「この、一番奥が守君の部屋だよ。何かわからないことない？」

「ないよ。ありがとう」やっと寝れるわ。

「そっか、詳しいことは明日説明するね。」

「うん、わかった。それじゃ」

「あのさ」ドアを閉めようとしたときに呼び止められた。

「ん？なに？」（できれば早くしてほしい）

「ここに来るまで平気だった？」

「？、なにが？」

「いや、何もないならいいの。おやすみなさい。」

「うん、おやすみ」

部屋に入り荷物が届いてるのを確認してベットに横になった。

（なんか、今日は変な日だったな・・・）そんなことを考えていたらいつの間にか眠りに落ちていった。

## 停電？（後書き）

なんか、良くなるように工夫したいんだけどどうまいかないよ  
見てくださったがた、本当にありがとうございます

今回は結構書けたと思うんだけどどうでしょう？

若干ペル○ナ3よりになっちゃうかもしれませんが。ごめんなさい  
もっとオリジナルになるように努力します

## 空さんと初登校！（前書き）

どうも、蜜柑です

3日に1本のペースで行きたいと思っています。気が向いたら2本目行くかもしれません。

基本的、主人公視点です。

今更ですが、この物語は結構長くなるかもしれません。  
なるべく、早めに出せるように努力します。

楽しんでいただけるだけで、幸いです

空さんと初登校！

学生寮一室 AM 6：00

ピピピピピピ

朝、携帯の目覚まし音が部屋に響き渡る。

「うーん」朝か、なんかあんまり寝た気がしないな。昨日は結構ぐっすり寝てたと思ったんだが。

眠い目をこすりながら洗面所に向う。顔・歯・髪などを洗い食事をすまし出る支度していたら。

（コンコン）ん？誰かノックしたのか？

「あ、守君起きてる？入っていいかな？」あ、昨日の確か、一之瀬 空さんだったかな？え、なに？起こしに来てくれたの？！

「あ、うん、起きてるよ。入っていいよ。」なんか、少し緊張するな

「おはよ守君、眠れた？」

「うん、まあ」正直まだ寝足りないけど。

「そっか、よかった。あ、先輩に今日学園まで案内しろって言われたんだ。だから一緒に行こ！」

「え、あ、いいの？」

「うん、全然いいよ。私も守君に色々と説明しないといけないし」

マジかよ！女の子と登校するなんて小学校低学年以来だ、嬉しすぎる！しかも、昨日は色々あったし疲れたが溜まっていたからきずかなかったけど、空さん結構可愛い！髪型はストレートロングの黒髪で容姿は上の中くらい、それ以上かもしれない。それに声も可愛らし、こんな可愛い子と登校！

「守君？どうしたの？ボーとしちゃって」

「あ、いや何でもないよ！」とりあえず落ち着こうか俺

「先に下に降りて待ってるからね。」

「うん、わかった」

いやゝ入学早々、良いことありまくりじゃないかな。とにかく、待たせると悪いし俺も早く下に降りよ。

駅のホーム AM7:30

ブルルルルルル

「守君、なんとか間に合ったね」

「うん、ごめんね。生徒手帳どこに置いたか忘れちゃってなかなか見つからなくさ」

走ってきたので、二人とも息が上がっている。

「うっん、別に良いよ。忘れたりするのは、私もしょっちゅうあるし」

ああ、なんて優しいんだろ癒されるは〜

電車のドアが開き中に入り座席に座り空さんが話し始めた。結構人がいると思ったけど案外少なく席もあまっていた。

「あんまり混んでいないんだ。」外では、朝は通勤ラッシュで、ひどいのにな。

「うん、殆ど学生だけだからね。電車の人がいれば自転車や歩いて行く人もいるし。それにここは、駅の始めのほうだから人がいないんだよ。」

「へ〜そうなんだ」

「えっと、まず何から話そうかな？何か、聞きたいことある？」

「うっん、あ、そういえば、あの寮って女子寮なの？」よくよく考えてみるとなんで女の子と同じ寮なんだ？

「いや、違っよ。男子寮でもないんだ。あそこは、何て言えばいいかわからないけど、クラブの寮みたいなのかな？」

「俺がそんなところにいていいの？」そのクラブに入ってないんだが・・・

「居るって言うっても新しいほうの寮が決まるまでだよ。」

「え、そうなの」空さんが「うん」と即答してきた。  
落ち込むはっせつかく可愛い子と一緒に寮に入れたと思ったのに。  
仕方ないか・・・

「確か、10日くらいでちゃんとした寮に入れるよ」

「そ、そっか」

「他に何かある？」

「この学園に詳しいみたいだけど入ってきたばかりじゃないの？」

「うん、私この学園の特別中学に通ってたから。」

「え！すごいね！」特別中学とは、この学園に数少ない中学の一つである普通は中学までは外で授業を受けるのだが能力が<sup>スキル</sup>高く優秀な生徒は中学でこの学園都市に入れるのだ。ということは、空さんはかなり頭もいいのか！どんだけ完璧なんだ

「そんなことないよたまたま能力に<sup>スキル</sup>恵まれたただだよ。」と、恥ずかしがる空さんは可愛かった

「で、どんな能力なの？」

「それは、秘密」

「え、なんで？」秘密とか言われたら余計知りたくなるだろ。

「せめてレベルだけでも！」

「仕方ないな〜レベルは9だよ」

「きゅ、9！す」！」

「でも、実戦ではあんまり使えないんだけどね・・・」と、俺はよく聞こえなかつたけど、その時の空さんは、意味ありげな顔をしていた。

「え？なに？」なにその、真剣な顔？

「ううん、何でもないので。」

「そう？」まあ、あまり詮索しないほうがいいだろうからしないでおくか

そのあと、ほかに色々聞いて時間が過ぎて行った。

（次は能力適性高校前でございます。お降りの際は荷物など（以下略））

「あ、着いたね。降りようか」

「うん、そうだね」いや〜楽しい時間だった。幸せだったな〜と、幸せ噛み締めていた時に空さんのほうから話しかけてきた。

「じゃ、私ちよつと用事あるから先に行ってるね。バイバイ」

「バイバイ」じゃ、俺もクラス表見に行くかな。

昨日は、学園の体育館に15時集合し入学式を行い校長や役員や

組合などの話などがかなり長引き１９時に終わった。本当はまだ続くみたいだったが、あまり遅くなると門限を越してしまうので入学式を早めに終わらせ新入生などを帰らせるそうだ。（因みに門限は１１時までと、決まっている）

まあ、１９時に終わってもまだそんなに遅くならないで帰れるからよかったが。前にも言ったが学園側の手違いで俺は数に数えられていなくて新学生寮には行けず仕方ないので旧学生寮に行くことになったのだ。その手続き等で随分と遅れてしまったでも、そのおかげで空さんとも会えたし良いと思う。

因みに、なぜ１５時から入学式かというと俺みたいに昨日に引越してくる奴がいるため、遅れたりする奴が沢山いたみたいなので１５時になったってわけだ。最低１５時までには学園内来ることと言われている俺も實際ぎりぎりの到着だった。学生が一斉に集まるため渋滞が等がものすごく続くのだ。しかも、都市内に入る時は本人証明等で色々と手間をかけさせられる。まあ仕方のないことないことなだけだな。

俺は「空さんと一緒のクラスに」と願いながら走ってクラス表を見に行った。なんと！見事に一緒のクラスだった多分こんなに喜んだのは、初めてじゃないかってくらいに喜んだ！

俺の叫び声が周囲の奴等をドン引きさせていることもしらないで……

## 空さんと初登校！（後書き）

どうも蜜柑です

女の子ってちょっと動かしずらいですね。

なかなか、バトル展開にならないです。

いちよう、次回かその次にちょっと出してみたいと思います。  
模擬戦みたいな感じでだそうと思っています。

本格的なバトルはちょっとまだ先かもしれません

次回もよろしく願いします！

**初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦（前書き）**

蜜柑です

初バトル展開（？）です。うまく書けるかわかりませんが  
出来るだけ、面白くなるように努力します

楽しんでみてください！

## 初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦

1年F組教室内 AM8:45

教室内が騒がしい。それもそうだが、普通なら30分に来るはずの担任がまだ来ないのだ生徒たちも、待ちくたびれて会話などをしている。俺も空さんと話をしていたところだった

「それにしても、先生遅いね。」

「うん、どうしたんだろ。まさか、遅刻とかw」俺はまだ来なくてもいいと思っている。まだ空さんとも話したいし。

「まさかそれはないよ」と、笑顔で返して来てくれた。

話が結構弾んできたところに、いきなり教室のドアが「バン」と勢いよく開き男の人が入ってきた。いきなりだったので全員が、びっくりして教室が静まり返ってしまった。

「先生かな？」

「え、いや、どうだろう」その男は見るからに眠たそうな顔つきで服とかも、しわだらけだった。とてもじゃないが先生と呼んでいいのか分からない。

「どうも、遅れてすみません。今日から君たちの担任になってしま<sup>おかざき</sup>う岡崎<sup>すいみ</sup> 睡三です。よろしくな」

教室内が「え！」っていう空気になったのは感じ取れた。それもそうだ、こんなやる気のなさそうな奴が教師と思うのも難しいことだ。

「あの、なんで遅れたんですか？」と、ほかの生徒が聞いた

「ん？ああ、昨日夜遅くまで起きてたからな。」

「ああ、残業とかですか？」と、俺が聞いてみると予想しない答えが返ってきた。

「あ？いや、朝までネットゲーしてた。」

あまりに予想外の答えに再び教室が沈黙してしまった。大丈夫なのかこの教師は、てか、教師事態なのが既におかしいと思うのだが。

「まあ、挨拶はこの位でいいだろう。」ちょっと待て、挨拶も何も名前ぐらいしか名乗ってないじゃんかよ！

「とりあえず！だ。これから君たちに能力模<sup>スキル</sup>擬戦をしてもらいます。3人一組のチームをこちらで、ランダムに決めちゃうから、お前たちは第3体育館に集合しておくように。詳しいことはそこで話すからさっさと行っておいてな、こっちは準備したいのがあるからさ」

何だ？その能力模<sup>スキル</sup>擬戦ってやつは？……。とりあえず向かうか。えっと、確か学園の東側だったよな。

「守君、一緒に行こ！」

「あ、うん！いいいこ！」空さんと一緒に組だったらいいな。

「集まってるって言うってまだ、先生来てないじゃん」

「でもさ、なんか色々置かれているよ」

そこには、人が横になって入れるくらいのカプセル？みたいなのが、綺麗に沢山横たわっていた。

「体育館ってよりも、何かの実験場みたいなんだが」

「うん、そうだね。これで何かするのかな？」などと、話していたらまたしても、担任がいきなり登場してきやがった

「よお、集まったな。それじゃ、説明するからよく聞いとけよ」

相変わらずめんどくさそうな話し方だな。若干いらつくぞ

「これから、お前らはその機械の中にはいつて寝てもらいます。その機械はバーチャルアリーナーの世界を見せる機械でお前らは夢の中のバーチャル世界で戦ってもらいます。この模擬戦は高校生に入ってから初めにやる授業だから。特中（特別中学の略）の奴らでも初めてやることになる。だから、皆無経験者同士なので特に勝負は偏らないことになる。それと、バーチャルの世界でもちよつとした痛みはくらうからその辺理解しておけよ。なるべく、実戦に近いほうがいいからだそーです。それから、これはチームで協力して戦ってもらうので負けたチームはカプセルから出

て、そのモニターでほかの奴らの戦いを見てもらからな。もしチーム内で、誰か負けたらそこで即退場だからな分かった？解からなくても、もう言わね。質問は受け付けないから。以上！あゝ疲れた」

説明は何となく分かったが、やっぱりこいつ少しだけ、いらつくな。

チームは、ランダムで決まり俺はまたしても、空さんと一緒になれた！

「一緒だね守君、お互いがんばろうね！」

「うん、もちろん、空さんがいれば負ける気がしないよ」

「もー、買いかぶりすぎだつて」

等と、俺の初リア充？つぷりの会話はほかの奴らに火をつけたみたいだった。

とりあえず、カプセルに入り目を閉じた。すると目の前が急に明るくなったかと思えば学園内の外に居た

「えつと？これがバーチャル世界なのか？かなりリアルだな・・・。それに、いつの間にか服が着替えられている」さつきまで、制服だったのが青色の服になっていた。これも、バーチャル？てか、空さんはどこだ？同じ場所に出てくるとかじゃないのか？と考えながら

周りを見渡していたら遠くの方から空さんの声が聞こえてきた。

「おーい、守君」空さんが走って来た

俺も、走って向いに行った。近づいてきずいたが空さんも制服が青色になっていた。

「バラバラのところに出るようになってたみたいだね」

「そうみたいだね。もう一人のメンバーさんは、何処に居るんだろう？」心配そうに空さんが言ってきた

「多分、大丈夫なんじゃない？流石に敵の近くや空中に出すはずないと思うし。近くにいると思うから捜してみよ」

「分かった。私は、来た道を戻って捜してみるから、守君は向こうのほうを捜してみて。」

「うん、わかった気をつけてね」

「うん」って言って走って行った。空さんは、どことなく張り切っているように見えた。

よし！俺も行くかな。多分、同じ青色の制服を着ているはずだから、敵と間違えないだろう。それに戦闘範囲だって、そう広くないはずだ多分この学園内だけぐらいだと思う。早く見つけて空さんと合流しよう。

しばらく先に行くと人が倒れていた。

「いた。多分あの人だ青い制服も着ているし。制服からして男の人だな。でも、どうしたんだ？やられたのか？でも、それなら俺らも退場になっているはずだ。もしかして、まだ起きてないのか？」俺は走ってそいつのそばまで行き起こしてやった。

「おい！どうした！大丈夫か？！」と、言ったらそいつは唸りながら言った。

「ううう……腹減った……」

「は？腹減った？」なんだこいつ？もしかして、生き倒れ？バーチャル世界で？

「朝、何も食べないできちゃってさ、なんか食うもんない？」あるはずないだろボケ！っと言ってやりたいが、こんなんじゃ戦力にもならんせめてやる気だけ出さなくては。

「後で、何かおこってやるから。とりあえず今はがんばれ」そう言ったらそいつは行きなり飛び上がってきやがった

「え、ホント！マジありがと！財布も忘れちゃってさ！学食の牛丼は550円だから！」ちよと待て、誰が牛丼おごるなんて言った？！まあ、今は仕方ない。とりあえずやる気だけは出してくれたみたいだ。

「えっと、俺の名前は、東海林 とうかいりん 誠二 せいじ だ！ヨロシクな！！」食物食えると知ったらこの変わりようか。テンション高すぎだろ

「俺の名前は、一宮 守ってんだ。宜しくな。」

「あゝ。守ってさっき可愛子ちゃんと仲良くしてた奴だろ。うらやましいなゝ!」

「あ、いや、そこまで仲がいいってわけじゃないんだけど」  
「とは言ったものの、顔は、にやけているかもしれない。」

「え、そうなの?じゃあ、俺にもチャンス有るかもってこと?!」

「そついう訳じゃねえよ!」  
「なに、言いだすんだこいつ!別に俺にあるって意味じゃないが。」

「まあまあ、冗談だつてゝ妬くなつて」

「お前だと冗談に聞こえないんだよ……って別に妬いてねーし!」  
「クソ!なんか調子狂うな!こいつ

「とにかく、あの子と一緒になんだろ?早く合流しに行こうぜ。まもりん」

「誰がまもりんだ!たくつ!」  
「と、誠二と会話がやっと終了したかと思つた瞬間にいきなり空が暗くなつた。」

「ん?何だ雲か?」  
「と、上を見上げてみるとそこには、車が俺らの頭上で浮いた」

「え?!何アレ?!」  
「と誠二も驚いていると、その車は俺たちめがけて落ちてきた!」

「のわあー!!」俺は、出したことのない悲鳴を上げて横に逃げた

車は地面に直撃して土煙をまき散らした。ギリギリセーフって感じだ

「あぴゃー!」誠二!それは悲鳴なのか?!・・・じゃなくて!

「お、おい!大丈夫か誠二!」

「な、なんとか!」煙の向こうで誠二の声が聞こえてきた。どうやら無事のようだ。

「でもいったい誰が」

「わっかんね!」煙も晴れて誠二が見えてきたぐらいに、15mぐらい先の階段の向こう側に人影が見えた。

「あ、多分あいつだ!階段の上のやつ」

「あの野郎か!よし!今すぐ行ってやつつけてこようぜ!」

「待て誠二!相手は多分、サイコ(念動力)使いだ!迂闊に近づいたらこっちもやばい!とりあえず空さんのところに行こう!」

「え、あ、ああ分かった。確かにそうだな女の子一人にしてやれねーもんな!」

「よし!走って振り切るぞ!」

「おおよ!」

走って振り切ろうとしても後ろからサイコ使いが車や木岩などを投げてくるのが音でわかる。怖いのであまり見たくない。

「あつ！・・・ちよつと待て！」

「うん？どうしたん？まもりん！早く行かねえと」

「決めてない」

「へ？」

「空さんとの集合場所決めてなかった」よく考えたらそんなことも決めずに出てきてしまってたのか！

「ちょ！それは！どんな天然さんだ！かわいいな！」

「言い方が気になるが、とにかくさつき居たところまで 行くしかない」と、思ってたなら。空さんの声が聞こえた

（守君、大丈夫！）

「え！あ、空さん？どこに居るの？」見渡しても、誠二とサイコ使いが遠くの方に見えるだけだ。

（私の能力なの。今、守君の頭に直接話しかけてるから）

「ええ！そうなの？！でも、なんで俺の居場所がわかったの？」  
「レパシー的な能力は相手<sup>スキル</sup>が何処に居るか把握しなければ使えないはずなんだけど

（詳しいことは、後で話すから。今は相手を振り切って！私はさつき会った場所の奥にある体育館に居るから！）

「分かった！今すぐ行くから！」

「お、おい！誰と話してるんだよ。まもりん！」俺たちの会話は誠二には、聞こえないみたいだ

「後で話す。お前、あいつを目くらませること出来ないか？！」

「え！出来るっちゃ出来るけどでも、逃げるのが先なんだろう？」

「いいから！とにかくやってくれ！」

「うっし！よく分からんが、分かった！危ないからちょっと先に行つてくれ！」

「おう！分かった！」なんだかんだで、頼りになるときは頼りになるやつなんだな

誠二は、立ち止りその場で深呼吸をして精神を集中してるみたいだ

「うおりゃあー！！！」と言って誠二が地面に手を着けた途端にあたり一面の地面にひびが入り盛り上がり崩れて、そこから土煙があたり一面に撒き散らした。まるで、ビルが崩れた時ぐらいの土煙だった。

「おお！掛け声はカツコ悪いがすげー能力スキルだな！！」離れてみていたがあれには普通に俺も感心した。

「おい」誠二が土煙の中を走って来た

「おお、お前って、結構すごいんだな！」

「まあな、やつと気がついたのか。ちなみに、俺の能力スキルは、土や鉱物を操れる能力スキルなんだよ。」

「あのまま、倒せたんじゃないか？」

「ん？いや、俺は、あれ位が今は限界ないんだよ」

「え、そうなのか？」凄いのか凄くないのかわからんやつだ。多分凄いのだろうが

「それより、早くしないと来ちゃうぜ」

「あ、そうだった。急きんごう！」

「はいよ」後ろの奴はまだ追ってこないようだ。土煙程度で足止めされているのかは、分からないが

その際に俺たちは空さんの待つ第二体育館まで走って行った。体育館近くに着いたら空さんが手を振って迎えてくれたことで、俺がさっきの誠二との会話で生まれた不快な気分が一気に吹っ飛んでしまった。

（やっぱり、俺のオアシスだな空さんは。）



## 初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦（後書き）

どうも、蜜柑です。

戦闘シーンで、表現しにくいですね。

努力していきます

前編で新キャラが二人出してみました。

今後も誠二君には登場してもらいたいと思います。

今回の話は前・中・後で分けていきます。

次回で勝負の決着をつけようと思います。後半は、勝負後の話みたいな感じです

次は明日か明後日には、出そうと思っています

戦闘も、がんばって盛り上がるようにしていきたいです

初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦 中編（前書き）

蜜柑です。

模擬戦は、この話で決着つけようと思ってます。  
もしかしたら、長くなるかもしれませんが

## 初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦 中編

バーチャル世界 学園内第2体育館内

俺たちは今、集合して体育館にいる

「守君大丈夫だった？」

「うん、まあ何とかね。空さんは大丈夫だった？」

「うん、私は何もなかったよ」

「そっかよかった。」

「ちょっと！ちょっと！俺のこと忘れてない？！」誠二が無粋に話に割って入ってきた

「忘れてねーよ。安心しろ」

「えっと、守君、こちらの方は？」空さんが俺に聞いてきたらすかさず誠二が自分から名乗ってきた

「ども！東海林 誠二です！宜しく！」

「うん、よろしくね。私は、一之瀬 空っていうの」

「空ちゃんか！可愛い名前だね！」

「え！そ、そうかな？」空さんの顔は赤くなっていた。

「おい、もうその辺でいいだろ。」

「また妬いちゃってゝ子供だなゝ」

「またそれか！」

「えっと、兎に角今はどうするか考えようよ」「空さんが少し戸惑いながら言ってきた

「う、うん。そうだね」「やべ、心配かけちゃったかな？

「そうだよゝまもりん」

「お前、牛丼奢らんぞ」

「すみませんした！！」「土下座してきやがった。どんだけ食いたいたいんだよ

「フフ、仲がいいんだね」

「え！」「マジで？こいつと？

「そうなんだよゝもう友達以上みたいなの？」

「早速面白い友達ができてよかったね。守君」

「え、まあ、そうかな？」「まあ、悪い奴では無さそうだが

「空ちゃんも友達だよゝ」なっ！こいつ平然と

「嬉しい。ありがとう」空さんまで！

「俺も空さんの友達だから！！」

「ありがとう守君」

つい言ってしまった。でも、結果オーライだな

「と、ともかく今はどうするか作戦を立てよう」やべ、顔赤くなつてないかな？

「うん、そうだね」何とか話は逸らせたな

「そういえば、さっきはどうやって俺に話しかけたの？」

「え？ああ、あれはね私の能力スキルなの」

「へーどんな能力スキルなの？」そう言えば、電車の時に聞いたけど教えてもらえなかったんだよな

「えっとね、千里眼って知ってる？」

「遠くの者を何でも見通すやつでしょ」確か昔本で読んだことがある

「そうそれ、私はその劣化版みたいなやつなの」

「劣化版？どゆ意味」誠二が不思議そうに聞いてきた

「私の本当の能力スキルは、別にあるの」

「え！それじゃ二重能力所持者なの！？」  
デュアルスキル

「うん。そうなんだ。」二重能力とは、普通なら一人に一個の能力が付くと言われているが、稀に二つ以上所持できるものが存在するために出来た言葉である。しかし、二つを所持した場合精神が激しく消耗するために実際は一つしか使わないのである。でも、空さんはそれを二つとも使えるらしい流石というべきなんだろう

「すげー！空ちゃんすげー！」

「ああ、確かに凄いなレベル9の理由が分かったわ」

「そんなことないよ。それに、有効範囲も結構狭いしそれに、これは、私が会ったことのある人がエネルギー（能力）を発している人しか見れないの」

「いや、空さんそこは、素直に凄いと思うよ誇るべきだよ！」

「えへへ、ありがとう」

「で、これからどうすんの？」

「あつ、忘れてた」素で忘れていた

「しっかりしろよ。まもりん」

「とりあえず、作戦を立てよう」

「そうだね」

まずは、今の状況を把握しよう。相手は3人で一人はサイコ使いあとの二人はまだ分からない多分相手は、もう仲間同士で集まったと思う。だとしたら厄介だ、一人の能力は知ってるが後の二人は分からない面倒な能力じゃないことを祈るだけだ。後はルールの確認だ。確か相手を一人でも戦闘不能にすれば勝ちだったはずだ。

「おい、誠二。お前さっきの技（？）以外に何かできるか？例えば鉱物から武器を創るとか」

「え？いや、どうだろうな。多分出来ると思うぞ形をはっきり想像したら。」

「そうか！じゃあ、刀とか出せるか？」

「刀か。まあ、やってみるけど出来ないかもよ。」

そう言って誠二が地面に手をやりその部分が歪みだし刀の形が浮かび上がった。きた。

「おお、がんばれ！あともう少しだぞ」あともうちょっとで完成するところで誠二が力尽きた。

「だめだ。疲れた！。すまんが、これで勘弁してくれ。」それは、刀とも呼べない物に出来上がっていた。だがこれでも十分使える

「ああ、十分だ。後でもうちょっと手伝ってもらっぞ」

「まだあるの！」

「あつたり前だろ！牛丼奢るんだぞ！その分の働きしろ！」

「人使いが荒いよーまもりん」情けない声を上げながら誠二が言った

「それと、空さんはここで、敵の動きを教えほしい。」

「うん分かった」

「よし！行くぞ誠二！詳しいことは行きながら話す。空さんは俺らに敵が近づいてきたら教えてほしい」

二人とも頷きこれからの戦闘に緊張しているみたいだ。俺もなんだがな

バーチャル世界 学園内 グ라운드

「ここに居れば敵も気付くだろう。誠二はさっき、打ち合わせした通りにやってくれよ」

「ああ、分かってんよ。それにしても、お前の能力<sup>スキル</sup>って結構すごいな」

「別に、それにこれは、俺一人では何もできないんだ。ほかの奴がいないと使えないんだ。」

「まあ、そうかしんねーけどさ」

「ほら、もういいだろ。そろそろ来るかもしれないし」

（守君に誠二君！相手の人たちがそっちに向かってきてるよ！）

「噂をすれば何とやらだ。準備しろ誠二！」

「はいよ！」地面に手を着け集中し始めた。

相手がこっちに気づいたのか攻撃をしてきた。念動力で物を浮かし投げてきたのはさっきの奴だな。後の二人は二手に分かれ俺たちの横に移動してきた

「挟み撃ちか！だけど、グラウンドに入った時点でアウトだな！」  
敵が接近して攻撃を始めてきた。

どうやら、残りの二人は発火能力と分身能力スキルみたいだが、そんなく  
らいなら関係ないな！

「今だ誠二！」俺が合図すると誠二は地面を強く押した。

地面が激しく揺れて俺たちの周りを土の壁が出来上がり、サイコ  
使いが飛ばしてきた木や車を止め、横に居る二人の敵の周りに土の  
壁で囲を作り閉じ込めた。

「よし！あれで、当分出てこられないだろ。後は、あのサイコ使い  
だけだ！」

グラウンドに入ってなかったサイコ使いには、囲が作れなかった。

「俺が行くから援護してくれ！」

「分かった！」

俺は、さつき誠二に作らせた刀（？）を持ち、サイコ使いのそばまで走って向った。その際にも、念動力で攻撃してきたが誠二が壁を作り何とか当らずに傍までやってきた

「クソ！寄るな！」相手も焦っているようだ。仕方ないことだ攻撃が当たらないとそりや焦る

相手のすぐ目の前にやってきた俺は刀を振り上げた。

「クソ！」相手が俺を念動力で吹っ飛ばそうとした瞬間に俺は透かさず相手の腕をつかんだ。意味も無く掴んだわけではない

「のわー！ー！！」俺は相手の攻撃で10mぐらい飛ばされてしまった。掴んだ腕も離れてしまった

「あぶね」と、相手が安堵している隙に俺はまた、走って近づいた

「しつこいんだよお前！」と言って、手を空に向けそこらへんの土やコンクリートの破片を一気に集め巨大な球体を作った

「ッ！なこともできるのかよ！」

「これで！終いだー！」と、勢いよく手を下に振り下ろしたら、球体がこつちに向かってきた

「くっ！行けるか！」俺は、手を球体の方に向けた。

そしたら、球体が俺の寸前で止まった。というよりも止めた

「な！お前！どうやって！」相手も驚いている。俺も出来て安心し

ているところだ

「お前から貰ったんだよこの能力は！」

「お、俺から？一体どうやって？！」

「さっき、俺が吹っ飛ばされる前にお前に触ったたるあの時だよ！」

「そんな！く、くそ！一体どんな能力だ！」  
スキル

「俺の能力はな、能力吸収っていうやつで一時的に相手の能力を  
スキル  
使えるようになるんだよ！」

「なっ！ひ、卑怯な！」

「卑怯で結構！！覚悟しろよ！」俺は相手に素早く近づき持っていた刀で切りつけた。切った時の感触は妙にリアルだった

「うわああー！！」血は出なかったが相手の電子体（バーチャル内での体）が切り裂けた。少し罪悪感はあるがこれで俺たちの勝ちだな。

空に大きくWINの文字が青く浮かび上がった。多分俺たちの勝ちってことだと思う。

「まーもーりん！！勝ったぞ！俺らの初勝利ー！！」と言って誠二が飛びついて来た

「のわ！離れろ！暑苦しいわ！」俺は誠二を蹴り飛ばした。

「照れんなよ〜まもりん！」

「照れてねえよ！！」本気で嫌なだけだ

遠くの方から空さんの声が聞こえてきた

「お〜い、守君〜誠二君〜」

「あ！空さん！」

「おお、空ちゃん！」

「二人ともやったね！二人のおかげで勝てたね！」

「いや〜それ程でも」と、得意気に誠二が言った

「勝負をつけたのは俺なのだが」

「細かいことは気にすんなよまもりん〜」

「はあ〜なんだか色々疲れたわ」

「お疲れ様。守君」

「ありがと〜空さん」

会話が終わると同時に周りが光に包まれ気が付いたら目を覚ましていた。

すべての模擬戦が終了した。どうやら俺達で最後だったみたいだ

「はい皆さんお疲れさん。なかなか良かったと思うよ。全部見てないけどね」正直すぎだぞお前！

「今日は、もうこれで解散だから適当に帰ってくれな。はい！それじゃ、さよなら」

帰ろうとした時に誠二に捕まってしまった

「おい！まもりん約束は果たしてもらうぞ！」

「約束ってお前もう下校だから明日な明日」

「なら、帰りに何か奢れ」

「はあ？お前何言って」

「俺は飯食えるためだけに頑張ったんだぞ！その位良いじゃんかよ」

「わ、分かったって！たく食いもんのためってどんだけだよ」空さ  
んと一緒に下校しようと思ったのに

「どうせなら空ちゃんも一緒に行かない？」おっ！お前以外に良い  
所あるじゃん

「え、私？」

「うん！まもりんの奢りで」そいつは戴けない話だが

「ごめんなさい！私ちよつと用事あるから先に帰らなくちゃいけないの」

「そっか」。分かったよまた今度行こうぜ」

「うん、また誘ってね。」残念だが仕方ない。

「空さんまた後で」

「うん、またね」空さんは走って行ってしまった

「それじゃ、行こうぜ」まもりん

「分かってるよ」

この後コイツの所為であんなに財布が軽くなってしまっなんて思わなかった……

## 初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦 中編（後書き）

どうも蜜柑です

バトルが終了しました。うまく書けなかったかもしれませんが。今後はもっとうまく出来るように頑張ります。後編は模擬戦後の話になると思います。

気が付いた人もいるかもしれませんが、主人公の能力を変えています。

最初は念動力だったんですけど、それじゃあ、あんまり話が進みづらいかнаと思って変更しました。すみません

次回は日曜日までに出したいと思っています。

初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦 後編（前書き）

どうも蜜柑です

まずは、遅れてすみません。結構ギリギリになっちゃいました  
誤字とか文が変なところが沢山あるかもしれませんが。すみません

今回はタイトルと全く関係ない話になるかもです

楽しめたら幸いです

## 初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦 後編

学園都市 中央街 PM3:00

俺と誠二は、今学園都市で最も繁華街が多い中央街に来ている。本当ならば、既に帰っている時間だが、誠二との約束で飯を奢るはめになったのだ。まあ、約束したのは俺だから仕方ないか

「それにしても、まだ着かないのかよ」駅から30分近く歩いてるんだが

「おいしい牛丼屋教えてやるからさ、そんなに焦るなってまもりん」

「歩き疲れただけだよ」

「あ、見えてきたよ」100mぐらい先に美牛と書かれた看板があった。ネーミングセンスには触れないでやろう

「やっと着いたか」

「早く行こうぜ。まもりん」

「分かってるよ」

牛丼屋 美牛

「おう、いらっしやいー」

「おっちゃんまた来たよ」なんだ？知り合いか

「あん？おめえ誰だ？」

「覚えてないの？！昨日来たばかりでしょ！」

「あゝ覚えてるような。無いような」

「ひで」。昨日、明日も来るって言ったのに「客の顔なんて、あんまり覚えてないだろ

「兎に角、座ろうぜ誠二」

「あ、うん」

「それにしても、あんまり人がいないな」

「まだ他の学校とかは、まだ授業してる時間だからうちらしかいないんじゃない？」

「ここって繁盛してるのか？」

「うん！ここおいしいから」

「本当か？」人がいないから不安になる

「大丈夫だって。そんなに心配しなくても」

「それで、何にする」早くしてほしいのか店主が聞いてきた

「俺、牛井一人前」

「そんじゃ、牛井特盛りのつゆだく。あと、ねぎ多めで！」

「ちょ！おま！容赦ないな！少しは遠慮しろ！」

「いいじゃんよ。俺がんばったんよ。それに約束だもんな」

「くっ！」ひ、卑怯だ！

「まあ、勝てたのは、まもりんのお陰なんだけどな」

「え！いや、そんなことねえよ！皆頑張ったからだろ」

「そうかもしれないけど、作戦は、まもりんが考えたんだろ。だからやっぱり、まもりんのお陰でもある」

「う、うん。まあ、そうなの……かな？」いきなり褒められたら、照れるだろうが……

「ハイよ。お待ちどうさん」丁度良い所で牛井がやってきた。

「お、きたきた！もう、腹減りすぎだよ。それじゃ、頂きま〜す！」

「お前の、でかすぎだろ！」3〜4人分ぐらいの牛井が誠二の目の前にあった。

「大丈夫だっ〜。この位」

「ちゃんと食べよ！俺の金なんだから！」

「分かってるって」

「人の金だと思って。まったく。」言い終わると、俺は牛丼を口に入れた。

「な！・・・何だこれ！う、うまい！かなり旨い！」多分初めてだったと思う。あんなに美味しい牛丼を食べたのわ。

「だろー！こんなおいしい牛丼無いよな！」

「ああ！文句なしにうまいぞ！」

「気に入ってくれたかい兄ちゃん達」おっちゃんが、嬉しそうに言ってきた。

「ハイ！とっても美味しいです」

「そうかい。よかったよ」

食べ終わると店を出て、駅に行った。ちなみに、牛丼の料金は合計で2500円近くかった。

誠二の牛丼で2000円かったみたいだった。こいつには、二度と奢らな

中央街 駅前 PM5:10

「あそこの、店ってあんなにするんだ……」

「うん。だから、今日は行けなかなうって思ってたんだけど、いやゝついてたわ」

まあ、美味しかったから許そう。今度、空さんを誘う時には、こいつは、誘わないでおこう

「そいじゃ、まもりん、俺は冬美町（北側）だから。もう電車も来てるし。またなゝ」

「ああ、じゃあなー」さて、俺も帰るかな。

学生寮 P M 5 : 3 0

ガチャ

寮の中に入ってきて、最初にソファ―に座っている空さんが目に入ったが、隣に居る初めて見る男の人が、一番気になった

「あ、お帰り守君」

「ああ、彼だね」隣に居る男の人が俺の傍に寄って来た

「やあ、こんばんは」

「こ、こんばんは」え？誰この人？

「おっと、すまない。私の名前は石神<sup>いしがみ</sup> 重吾<sup>じゅうご</sup>。君たちの学園の理事長と、この部活の顧問をさせてもらっているよ」

「初めまして、俺は一宮 守です」

「ああ、君のことは空君から聞いてるよ。初めての模擬戦で素晴らしい活躍だったって」

「えーいや！そんなことは！」

「守君のリーダーシップは、凄かったよ！」

「そ、空さんまで」なんか、今日は褒められてばっかだな

「君の能力も、凄いんだってね<sup>スキル</sup>」

「はあ、まあそうですね」

「優秀な生徒が来て、僕は嬉しいよ」

「ちょ！そんなに褒めないで下さいよ」正直恥ずかしい

「ええ、どうして？守君本当に凄かったよ」

「あ、ありがとうございます・・・」つい、敬語になってしまった。

「というか、理事長って、入学式の時に居ませんでしたよね？何ですか？」

「あまり長くなると君らもうんざりするだろ。だから、また今度つてことにしといたのさ」

なんて、話の分かる良い人なんだ！

「それじゃ、僕は用事があるから失礼するよ。」

「あ、理事長。また後で来られるんですね？」

「うん、また後で来るよ。それじゃ」そう言って、理事長は出て行った

「後で何かあるの？」

「うん。部活のミーティングみたいなのを」

「ふん」

「あ、そうだ。誠二君と出かけたんでしょ、どうだったの？」

「お金が、かなり減ったよ・・・」

「あははは。そっかー。災難だったね」

「全くだよ」

空さんとソファに座って話していると、もう一人の寮生が帰って来た

「あ、先輩。おかえりなさい」

「え、先輩？」そう言えば、先輩が居るようなこと言ってたっけ

「ああ、ただいま」女の人だった。しかも、結構美人だった

「先輩、朝話した新しい寮生です」

「君か、話は聞いてるよ。災難だったな。こちらも急いで手配しているところだ」

「ありがとうございます。えっと」

「ああ、すまない。私は白鷺<sup>しらさぎ</sup> 真理<sup>まり</sup>だ。よろしく」

「はい。宜しくお願いします」なんか、さっきの人より大人な感じだ

「って！白鷺！？まさか、白鷺財閥のお方ですか？」

「ああ、そうだが」

白鷺財閥とは、超能力の開発をした財閥なのだ。この学園都市も白鷺財閥の力で作り上げられた。この人は、そんな大層な財閥の人なのか？

「あまり、気を使わないでいい。普通にしてくれ」

「え、あ、はい。分かりました」普通って言っても、この人と普通に話すのって結構無理がないか。

「そっいえば、一之瀬、理事長は来られたか？」

「あ、はい、でも用事があるのでって、帰られました。後でまた来るそうです」

「そうか、分かった。」

「それでは、私は上で待つとしよう。」

「私も後で向かいます」

「分かった」

そう言って、先輩は上の階に上がって行った。

「この寮ってある意味凄いよね」

「え？そうかな？まあ、確かに寮って、こんなホテルみたいじゃないよね」

そこもだが、他に一番すごいのがあってしょうよ空さん

「それじゃ、私自分の部屋に戻るね」

「あ、分かった」

「それじゃ、おやすみ守君」

「うん、おやすみ」

学生寮      5 F    PM 11:40

ガチャ

「いや、白鷺君遅れてすまない。」息を荒立てながら入って来た

「あ、先輩来られましたよ」

「構いませんよ理事長」

「あれ？二人だけかい？二階堂君は？」周りを見渡しながら言った

「二階堂先輩は、出かけましたよ」

「ああ、そろそろだしね」

「全く、二階堂には言つといたはずなんだが」

「まあまあ、良いじゃないか。やる気になってくれてるんだし。」

「そうですけど」

「それに、今は、彼の方だ。」

「はい、一之瀬の話によると、どうやら彼にもあるみたいです」

「いや、でも、私の間違いかもしれませんし・・・」

「それでもいいよ。もうすぐ時間だし、その時はつきりするだろう。彼が適応者なのか」

「守君」

時刻は0時になろうとしていた。

学生寮 2F 守の部屋 PM???

守は普通に眠っている。しかしこの時、守は寝ながらも普通の空間ではない場所に移動していた。

学生寮 5F PM???

「やはり、彼にもあつたみたいだね」

「その様ですね。理事長」

「でも、普通なら暴走を起こすんじゃないんですか？」

「普通ならそうだけど、彼は見ての通り暴走する気配がないみたいだ。もしかすると、どこか君たちと違う力があるんじゃないのかな？」

「私たちと違う力・・・」

「兎に角、今後の様子を見てから決めようじゃないか。」

「一之瀬。もし彼の身に何かあつたら頼むぞ」

「はあ、分かりました」困った顔をしながら言った

「そうそう起こるものじゃないから、そんなに気を張らなくていいよ。一之瀬君」

3人はモニターに映る守を見守りながら、この時間が過ぎて行った

初授業Ⅱ能力（スキル）模擬戦 後編（後書き）

どうも蜜柑です。

なんだかペルソナ3になって来ちゃいました。

P3にならないように超能力者どうしの戦いを増やしていきたいです。

悪役？的なのは、まだもう少し先かもしれません

## 意外な敵（前書き）

どうも蜜柑です。

最近ネタ切れで、出すのが遅くなってます。  
すみません。

やっと物語に入れそうです。

今回から日付と曜日をつけようかと思っています。

日付と曜日は、最初の文と変わる時に出します。

## 意外な敵

学生寮 AM7:00 4月7日 金曜日

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

入学してから二日目の朝。守は、目を覚ました。

「んあ、朝？」ベットから起き上がり、登校の準備をした。

「なんか、今日も、あんまり疲れが落ちてないような？昨日も早めに寝たのにな」部屋のドアを開けて下に降りた。

「誰もいないか。空さんもう行っちゃったのかな？まあ、いいか。俺も早く行こ」寮の扉を開けて学園に向かった

1年F組教室内 AM8:00

「ういーす。まもりん」

「おはよ守君」

「あ、おはよ」

「空さん、今日早いだね。」

「うん、今日は部活の朝練があったから。」

「部活つてあの寮の？」　「そういえば、どんな部活なんだ？」

「あ、私ね部活を掛け持ちしてるの。」

「そうなんだ。どんな部活？」

「薙刀部だよ」　薙刀部？　そんなのあるんだ。

「へー、薙刀部に入っただ空ちゃん。かつこいいよね」

「うん！私も憧れて入っただ」　え、なに？　この学校では、ポピュラーな部活なの？

ガラガラガラ

教室のドアが開いて先生が入って来た。

「お前ら席につけ。ホームルーム始めるぞ」　今日は遅れなかったみたいだな

「ホームルームと言っても、俺からの連絡しかないけどな」

ホームルームを、適当に睡三が終わらせ、その後、授業に入った。授業は、外と変わらず能力系スキル以外は、普通の授業なのだ。因みに睡三は、能力と体育専門スキルだそう。てか、あいつに務まるのか？

実際、普通の授業をやるのは、この学園では初めてだったが、なら問題はなく最後の授業まで出来た。

1年F組 教室内 PM 4:30

キンコーンカーンコーン

授業終了のチャイムだ。外と何にも変わらな過ぎて少し退屈だった。

「まもりーん、一緒に帰ろうぜ」誠二が俺の傍までやって来た

「奢らねーぞ」

「いやいや、一緒に帰るだけだから!」

「空ちゃんは?」

「ごめんね、今日も部活があるから無理っばい」

「そつか。じゃあ、行くか。まもりん」

「あ、ああ。それじゃ空さん先に帰ってるね」空さん大変そうだな

「うん、また後でね」

学生寮 1F ロビー AM 6:00

ガチャ

「一宮か。おかえり」

「あ、はい。」

寮に居たのは白鷺先輩だけのようだ。折角だし何か話そうかな

「あの、白鷺先輩」

「ん？なんだ」

「この寮って、俺と空さんと先輩しかいないんですか？」

「いや、他にまだ一人居る。名前は二階堂 真琴にかいどう まことという名前だ」

「へー、そんなんですか。でも、見ませんね」

「ああ、あいつは、部活中だからな」空さんと同じ部の掛け持ちかな？

「そうなんですか。」

「ああ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」か、会話が続かねー！言葉のキャッチボールができない！向こうから話を続ける気配すらないよ！

「そ、それじゃあ、俺上りますね。おやすみなさ」

「ああ、おやすみ」

やっぱり、いきなり話しかけられたら変に思っよな。

「一宮」

「あ、はい」

「その、体は何ともないか？」

「？はあ、まあ、何ともないですね」

「そうか。呼び止めてすまない。ゆっくり休むといい」

「は、はい」どうして急にそんなこと聞いたんだ？

学生寮 5F PM???

「今日も、何も起こらず寝たままか」

「その様ですね。理事長」

「あ、あの、もうこんなことやめて守君に話しませんか？」

「そうしたいのも山々だが、なんて話す？あなたには、能力とは別の特別な力がある。と、言っても、そうそう信じてもらえないだろう。ましてや、盗撮してるなんて言えないだろう」

「そうですけど」

「まあ、そんなに焦ることないよ。いずれ話す時が来るだろうし」

「いずれですか・・・」

「そういえば、今日も二階堂君は来てないみたいだね」

「はい、申し訳ありません」

「いいよ別に謝らなくて」

ピピピピピピ 部屋にある通信機から着信音が鳴った

「どうした？真琴か？」

（今、かなりでかいやつに追われている！すまないが、俺一人では倒せない！今そっちに向かっている）

「え！ちょっと先輩、あいつら連れて、ここに来るんですか！」

「やむを得ないだろ。一之瀬、一宮を出来るだけ遠くに逃がしてくれ！」

「そんな！先輩たちはどうするんですか！？」

「私たちは、奴等と戦う。一之瀬も間に合ったら来てくれ！」

「は、はい分かりました」

「理事長はここに居てください」

「わ、分かったよ」

(おい!もう着くぞ!早くしろ!)

「分かっている!」

学生寮 2F 守の部屋 PM????

外で非常事態が起こっているのにも関わらず、守は眠っていた

「ZZZZZZZZZZ」

ドン! 何かが起き、建物が揺れ、守がベットから落ちた

「わ!わわ!な、なんだ!地震!」

「守君大丈夫?!ごめん、入るよ!」

「そ、空さん。どうしたの?地震でも起きたの?」

「兎に角、ここから今すぐ逃げて!」に、逃げる?

「逃げて?何処に?てか、なんで?」

「兎に角一緒に付いてきて!」

「う、うん」なんでそんなに焦ってるんだ?

「いちよう、これ持っていて」そう言って、映画などでよく見るハンドガンを渡してきた

「ちょ！なにこれ！」空さん、何かの冗談か？

「いいから、行くよ！」

学生寮 1F ロビー 裏口 PM????

「ここから、外に出よ！」

「わかった！」

（一之瀬、聞こえるか?!）

「先輩！どうしました?!」

「え？なに？先輩？」空さん能力使ってるのかな？

（すまない！本体が逃げてしまった！それと、どうやら敵は暴走状態の適性者らしい）

「え！そうなんですか?!」

（ああ、それと、今、敵が何処に居るか分かるか）

「えっと、今は……」

ドン！！非常口の扉が激しくへこんだ。

「「え？」」なんだ、今何が起きた？

（おい！どうした？今、敵はどこに居るんだ?!）

「い、今、私たちの目の前に居ます・・・」

（な！今すぐ、そこから、逃げろ！）

「は、はい！！」

「空さん！どうしたらいい！」俺も意味が分からず焦りだしてきていた

「と、兎に角、逃げなくちゃ！」

「逃げるって何処に？！」

「う、上に上に逃げましょう！」

学生寮 屋上 PM???

「ハアハア、疲れた」

「多分もう大丈夫だから」

（大丈夫か二人とも？敵は、1階には居なかったぞ）

「え！ホントですか？じゃあ、今どこに？」空さんが目を閉じて精神を集中させた直後

ドン！と、後ろから大きい物音がした。

「まさか！」俺と空さんは振り返った。

そこには、映画でしか見たことのない、色々な岩や鉄骨をくっつけたような、巨人が目の前に現れた。

「な！なんなんだよ！あれ！」

「あれが、ここを襲ってきた敵。神使<sup>しんし</sup>」

「しん・・・し・・・？」

次の瞬間、巨人が大きな岩を投げてきた。

「うわあ！！！」

「きゃあ！」

岩は、外れたが後ろの扉が塞がれてしまった。

「これじゃ、中に逃げれない！」

その怪物がゆっくりと俺たちに近づいてきた。そして、信じられないものが目に入った。

「誠・・・二・・・？」

巨人の丁度胸の真ん中に誠二が埋まっていた。これには、空さんも驚いていた

「なんで・・・誠二君が」

「おい！誠二！大丈夫か！」何度声を掛けても反応がない

「まさか！死んでるんじゃない！」

「多分大丈夫。あれは、誠二君の能力から生み出された怪物だから、誠二君が死んじやったら、あの怪物も、消えちゃうはずだから」

「じゃあ、誠二はまだ生きてる！」

「うん！でも、時間の問題かも。誠二君が、あの怪物と同化しちゃう前に助けないと、誠二君が死んじやう」

「助けるってどうやって！」

「あの怪物から引き離せば、助けられるかも。元々、あれは誠二君の能力で、出来てるから、誠二君事態が離れると、体を維持できないで、崩れると思う！」

なるほど。でもどうやって、離す近づいただけでも殴りかかってきそうな奴を……

「でも、私のもう一つの能力でも、あの体なら足止め程度しかできないかも」空さんも、どうしたらいいか分からない、といった感じだ

あいつの体は能力で作られている、だとすれば……

「一か八かやってみるしかない！」これくらいしか作戦が思いつかない

「え、守君どうしたの？」

「空さん、俺の作戦聞いてくれる？」

「作戦？」

「うん。まずは、俺があいつの傍まで行きますから、空さんは、あいつを少しの間足止めして置いてほしい。その間に、俺が、誠二の能力を吸収して、あの巨人の体から誠二を引き剥がす！」空さんは、数秒唖然としてた

「でもどうやって!？」

「多分、あいつの体は岩や土で、出来ているから、誠二の能力を使って、誠二の周りの岩や土を崩して、その隙に、あいつを引き出す。俺は、まだ、誠二の能力に慣れてなくても、それくらいなら、出来ると思う」

「でも、失敗したら！」

「今は、失敗なんて考えてる場合じゃない！誠二の命がかかってるんだ！」

「そ、そうよね！今は誠二君の命が掛ってるものね！弱音なんて吐いてられない」

「よし！作戦開始だ！」俺は、走って巨人に近付いった

グオオオオオオオオオオオオオオオオ

ものすごい轟音。響き渡る不気味な声。あれが、誠二の生み出したってことも今の状況も信じられない。だけど、これが現実だってことはすぐに分かった。

巨人が自分の腕を勢いよく振り、その腕から石が飛んできた。

「がっ！！」近距離で石が頭部に命中し、血が出てきた。

この痛みは夢なんかじゃない。現実だ。

「守君！！」

「大丈夫だから！空さんは足止めをしてくれ！」

「分かった！」深く深呼吸をし、手を巨人に向けた。

青い閃光が巨人の足と腕を包んだ。すると、巨人の足と腕が地面にくっついて、よつんばいの格好になった

「今だよ！守君」巨人は何とか動こうと必死になっている。

「うおおおお！！」透かさず巨人の下に潜り込み、誠二をつかんだ。

後は、誠二の周りを崩すだけだ。俺は巨人の体に手をやり誠二の周りの岩や土を崩した

「よし！今だ！」誠二を思いいきり引っ張り出し、横に吹っ飛ばした。

やった！成功だ！と、俺が安心した直後

「守君！危ない！」

「え？」気が付いた時には、もう遅かった。

巨人の体が崩れだし始め。俺に、巨人の瓦礫が落ちてきた。

「うわああああー！！！！！」

俺は死ぬのか？

こんなところで？

まだ、高校生なのに……畜生。

## 意外な敵（後書き）

どうも蜜柑です

今回、中途半端なところで終わってしまいました。すみません  
そういえば、ハンドガンの件、出ただけ無駄でしたね

次回は、土曜日までには、出したいと思います。  
楽しんで頂けたら幸いです。

## 狭間世界（前書き）

どうも蜜柑です

今回は、別に話と関係ないかもしれませんが  
でも、新キャラは登場させました！

もっと詳しいことは、後々話します。

## 狭間世界

学園都市 中央病院 AM 11:20 4月13日 水曜日

「う・ん・．．ここは？．．」

俺は、ベットに横たわっていた、眠っていたのか意識がはつきりしないが、どうやら助かったみたいだ。

「おう、気が付いたか？」

「え？」

俺の隣で、聞き覚えある男の声が聞こえた。そこには、病み上がりにあまり見たくない奴がいた。

「せんせい？」そこに居たのは、俺の担任の睡三だった。

「お前も災難だな。入学早々、病院の厄介になるなんて」

そうか、俺、やっぱりあの時下敷きになったのか。でも、なんで無事なんだ？

「どうして俺」

「あの場に居た誠二に、感謝するんだな。」

「誠二に？」

「ああ、一之瀬の話だと、お前に落ちてきた鉄骨を、能力で助けたみたいだぞ。誠二も精神が限界だったみたいで、助けたら直ぐに気絶したみたいだけだな。」

「それで、誠二は大丈夫なんですか？」

「お前より、重症じゃないから大丈夫だぞ。」

「そうですか、安心しました」

「俺は、もう行くから、お前は、もう寝ろ。それと、念のため今週はもう学校休め」

「はい。分かりました。」

そう言い残すと、睡三は病室を出て行った。  
俺も、いつの間にか眠りにについていた

学生寮 1F PM 6:00 4月16日 土曜日

ガチャ

「あ、守君。おかえり」

「あ、空さん。ただいま」

あれから三日、特に何も起こらないで退院し、今、学生寮に帰って来た。

「二日も見舞いに来てくれて、ありがとう」

俺が入院している時に、学校が終わったら空さんが、見舞いに来てくれていた。

「うっん、私がちゃんとしなくちゃいけなかったのに、守君に守ってもらって、ほんと私ってどうしようもないね……」

空さんは、俯き、空さんが今まで出したことのない悲しい声で喋っていた。

「そんなことないよ」俺は、そんな空さんは見たくなかった

「……うん、ありがとう」

それでも空さんは、顔を俯かせたままだった。この時、俺はなんて返事をすればよかったのだろう。

「あ、あのね、後で寮の5階に来てくれる？」

俺の気を察したのか、空さんは顔を上げいつも通りに話してきた。

「別にいいけど、どうして？」

「あの日、起こったことをちゃんと説明しなくちゃいけないし」

それは俺も気になっていたか断る理由などない。

「誠二君も後で来るから、その時一緒に来てね」

「誠二が？」

「うん。誠二君にも説明してあげないと」

「分かった」

それじゃ。と、言って空さんは上にあがって行った。

学生寮 1 F P M 8 : 0 0

ガチャ

寮の扉が開き、誠二が入って来た

「よーっす、まもりん。大丈夫だったか？」

誠二はいつも通り明るかった。というより、うるさかった

「おお、誠二。久しぶりだな。俺は大丈夫だが、お前は、どうなんだよ」

「俺は、あの位、どーってことねーよ」

仁王立ちしながら自慢げに話してきた。

「そうか、よかった。それと、ありがとな」

「なにが？」「誠二は何の事が分からない。みたいな、態度をとって来た」

「お前が、助けてくれなかったら、俺は死んでたかもしれない」

「ああ、俺その時のこと覚えてないんだよ。お前に助けられたことまでは、覚えてるんだけどな」

「そうなのか？」

「うん。多分無意識だったのかな？」

「まあ、とりあえず、ありがとな」

俺が、そういうと、誠二は笑って返してきた

「お互いにな」

こいつは、ホントに良いやつなんだな。

「とりあえず、上に行こう。空さんも待ってるだろうし」

「はいよ」

学生寮 5F PM 8:05

ガチャ

部屋には、空さん、白鷺先輩、理事長と、その隣にいる、男の人とスーツを着た女性の人がいた

「来たか。そこに座ってくれ」先輩が目の前ソファを指さして言った

「あ、はい」

ソファーに着き、改めて周りを見てみて、この部屋が普通部屋じゃないことに気が付いた。

「この部屋って何なんですか？」

「まあ、作戦室と、言ったところだろ」

「はあ……」

「そんなことはどうでもいい、今、君たちに、あの日起きたことを説明する。聞く準備はいいか？」

先輩の顔が真剣な顔つきになった。多分重大な話なのだろう

「はい」

「そうか、では話そう」

次の瞬間先輩の口から信じられない真実が告げられた

「単刀直入に言う、君たちは能力とは別の特別な力に目覚めたのだ。<sup>スキル</sup>そして、その力で、我々と共に戦ってほしい」

「「は？」」

俺と誠二は同時に声が出た

「話を端折りすぎだ。もっと詳しく話してやれ真理」と、理事長の隣の男の人が言った。

「そうだな、すまない。そうだな何から話そうか」

「あの、あの時俺に何が起こったんですか？てか、あの空間は何なんでしょうか？」

誠二が自分に起きたことを、確かめたいために聞いた

「そうだな、そこから話そう。」

一間置いて話してきた

「あの時、君は力が覚醒して軽い暴走が起きたんだ」

「暴走？」

「そう、君はあの日、あの世界に入る力が着いたのだ。最も、力が覚醒した時は必ず暴走を、起こすのでな、それは仕方ないことなのだ」

「でも、俺は何にもなりませんでしたよ」

そう、俺はあの時、誠二を助ける時、確かにあの世界に居た。それは、俺にも力があるということなのではないだろうか？なら、俺にも暴走が起こってもいいはずだ。

「すまないが、私にも分からない。だが、君にも力はあるはずだ。それも、私たちと違った力だ」

「違う力……」

「そう、唯一あの世界に抵抗した力。それが、どんな物なのかは、分からない」

「そう……ですか」

俺が納得したのを見て、誠二が次の質問に映った

「その、先輩たちが言う「あの世界」って何なんですか？なんで皆には、気づかれないんですか？」

確かに、普通なら皆気づいてる筈の騒ぎだったはずなのに、騒動どころかニュースにもなってないなんて。

「あの世界は、現実と夢幻の狭間の世界。私たちは、「狭間世界」と呼んでいる」

「「狭間世界？」」

分けが分からなくなってきたぞ。現実と夢幻？狭間？何だそれ？

「狭間世界は、毎日0時に訪れる世界。そして、力に目覚めた者しか訪れない世界。そして、狭間世界で起きたことは、現実には影響されない」

それなら、放っておいてもいいんじゃないか？と、思っていたら、先輩があとつけた

「ただし、人は例外だ」

「え？・・・ひ、人？」

「食われるのだ。あの世界の住人に」

「住人って・・・てか、食われる！？」

「ああ、稀に、狭間世界に行ってしまう者が居るのだ。力がない故に、そのまま、奴らの餌食だ」

「その住人は一体何なんですか？！」

誠二が驚きを隠せずに言った

「神使と言った化物だ。奴等は私たち能力者が出しているエネルギーで生まれるのだ」

「！」

俺は思い出した。あの時、誠二に着いていた化物を。俺や空さんを襲った化け物を思い出した

「そんなことがあったら、大騒ぎじゃないですか！！」

誠二は焦っているようだ。無理もない普通の人間なら同じ反応を取るだろう

「神使は、獲物の精神と能力を食らう。食われた人間は、精神と能力を奪われてしまい、廃人になり姿を消してしまう」

「そんな！助けられないんですか！！」

「食われた際に、その神使を倒せば、その人間は元に戻る」

「よ、よかった」

誠二は安心したそうだった。確かに助けられるなら絶望的じゃないはずだ

「そこで、君たちに頼みたいこと」

「頼みたいこと？」

「我々と共に学園都市を、いや、世界を救ってほしい」

「世界を・・・」「救う・・・？」

「そうだ。狭間世界で唯一我々が戦える存在なのだ、放っておけば人が襲われ、必ず被害が出る。その対抗のために、我々と戦ってほしいのだ。今すぐに返事をしろと言わない、落ち着いてからでもいい。それに、これは自分も命がけなのだからな」

俺と誠二は顔を見合わせた、多分考えてることは同じだろう。なんだ、かんだで、こいつとは息がぴったりだからな。

「俺、やります。俺達しかできないのなら、やるしかないだろう！な！まもりん！」

「そつだな・・・。俺も、やります」

二人の即答に周りの人たちが呆気にとられていた。

「いいのか？そんなに早く決めてしまつて」先輩が確認してきた

「そ、そうだよ。守君も誠二君もよく考えて」空さんも、心配そうに俺らに話してきた

それでも、俺の答えは変わらない

「考えた結果がこうなんだ。俺たちも戦うよ」

俺が言うと誠二も答えた

「そうそう。それに、空ちゃんも戦ってるんでしょ？俺たちが逃げてどうすんのよ！ってな」

俺たちの答えを聞いて理事長が話してきた

「いやゝ、頼もしい限りだね！一之瀬君も同級生の仲間が増えてよかったじゃないか。それに、こんなにやる気を出してるのに、断るなんて失礼じゃないかな」

「それは……。そうですけど」

「本当に良いんだな？」先輩が再度確認してきた

「はい」「もちろんす！」

「そうか、すまないな」先輩は微笑みながらお礼を言って来た

「なら、メンバーを紹介しておくか」

「メンバー？」

「そう、グループ部活のメンバーだ。」

「まずは、ここの、顧問の理事長だ。理事長は、あの世界を消すための手掛かりを捜してもらってる。」

「もつともまだ、何もわかっていないがね」そう言っ  
て理事長があとづけた

「一之瀬と私については、別に説明しなくてもいいな」

「あ、はい」

「そして、そこに居るのが、ここの住居人。にかいどう二階堂 まこと真琴能適学園  
の3年生だ」

「二階堂 真琴だ。宜しく」

無愛想？な人みたいだ。

「あ、はい。宜しくお願いします」

「そしてこちらの方が、中央警察庁の警部の秋葉 あきは楓 かえでさんだ」

「宜しくお願いします」

綺麗な人だ。名前の通り秋が似合う人で、とっても清楚がある感じ

だった

「警察の人って……、さっきの話、警察は知っているんですか？」

「はい、一部のお方のみが、知られています」

「それなら、警察は何にも対策を取らないんですか？」

「そうしたいのですが、あの世界ことを言ってしまうと、世界中は大混乱です。あの世界は、悪用にも使えますから。そういった人たちがいる可能性があるので、情報公開はやっておりません」

「でも、警察の人でもこの世界で戦える人はいるんですよね」

「私もそうなんですが、私たち大人は、薬であの世界に干渉しています。その薬が合わない人や効果が早く切れてしまう人が出てきまして、今では薬に適用できる人しかいないのです。それに、神使には、現実の武器はあまり効かないんです」

警察も対抗策が見つからないのか

「そうなんですか。すみませんでした」

「いえ、不甲斐ないのは、私たちですから」

楓さんとの話が終わると、先輩が話を続けた

「まあ、仕方のないこと何ので、楓さんたちの所為ではありませんよ」

「ありがとうございます」

「この位だろ。今日はもう遅い寝てゆっくり休むといい」

「はい、分かりました」

学生寮 2F 廊下 PM10:00

どうやら、誠二は、この寮に引っ越すことになったようで、俺も、このまま、この寮で暮らすことになったようだ。

「いや、まさか、自分がこんなことに巻き込まれるなんて、思っても無かったぞ」

誠二が興奮気味に話しかけてきた

「確かに、普通は信じられないな」

「でも、世界の運命が掛ってるならやるっきゃないっしょ!!」

「そうだな」

妙にハイテンションの誠二の相手は、疲れるんだよな。

「なんだよ。テンション低いぞ!」

「悪い、俺眠いんだ。」

「眠いって病院で沢山寝てただろうが」

「ああ、でも眠い」

「はあく。まあ、兎に角、改めて宜しくな。まもりん！」

「ああ、宜しく誠二」

とりあえず、騒がしい毎日になることは、確かだな。

## 狭間世界（後書き）

どうも蜜柑です

新しく出てきた楓さん、これから、活躍してもらおう？かも

話の続きではありませんが、今回は、キャラ紹介？をしたいと思います  
キャラの能力などを紹介します。こちらは、多分早く出せると思います

話の続きは少し遅くなると思います。すみません

## キャラ紹介 1（前書き）

どうも蜜柑です

今回は、キャラ紹介です  
なるべく細かくしたみようかと思います

キャラの能力が、気に食わなかったら、すみません。  
良い能力が、思いつきませんでした。

話の続きはまだかかりそうです。今週中に出します。すみません

## キャラ紹介 1

いちみや まもる  
一宮 守

身長 174 cm 体重 60 kg 15 歳

この物語の主人公。能適学園1年生

容姿は、上の中よりちよつとした 髪型は前髪カールストレート。  
長さは、普通な感じ？

嫌いな食べものは、特になし。基本何でも食う

勉強は、出来なくはない、いちよう名門校だから。成績は中の上。  
運動は出来る方

リーダーシップがあり、狭間世界では皆と違った力を持っている。

両親は、母親が自分を産んでから他界。父は海外出勤で中学の時は親戚に預かってもらっていた。

スキル  
能力は、能力吸収。レベルは7

相手や能力に触りさえすれば、その能力を使えるようになる。  
ただし、能力吸収は1つだけ。しかも、30分すれば無くなる。  
吸収している際に別の能力を吸収できない。

いちのせ  
一之瀬 空

身長 165 cm    体重    44 kg    15 歳

この物語のヒロインのうちの1人。能適学園1年生

容姿は、上の上で、    スタイルもいい。

髪型はストレートロングの黒髪。肩に少しかかるくらいの長さ

嫌いな食べ物は、辛いもの。好きなのは、甘いもの（ケーキ類など）

お化けなど怖い話が苦手。基本明るいが、自分のせいで人が傷つくとひどく落ち込む

勉強は、かなりできる。成績は上の上。薙刀部に入っており、運動もできる

両親は、父母が他界。小学6年まで、祖母の家で預かってもらっていた。

中学から学園都市に住むことになった。

スキル  
能力    千里眼と発電能力の二重能力レベルは9

千里眼は基本的、敵を見分けるのに使う。が、有効範囲が狭くて、検索できない時もある。

神使はエネルギー（能力）と精神の塊なのですぐに見分けがつく。仲間の場合、一度会ったことある人でないと検索ができない。

狭間世界では、薙刀を使用している。

発電能力は、最大1億ボルトを出せるくらいの能力。金属同士を電磁波でくつつけることもできる。

千里眼と合わせて、少し遠くの敵に電撃を落とすこともできる。  
(1kmくらい)

力が覚醒したのは、中学2年の時で、その時から、狭間の世界で戦っている。

---

東海林 誠二 とつかいりん せいじ

身長は178cm 体重は66kg 15歳

守の友達で、これから共に、狭間世界で戦う仲間 能適学園1年生

嫌いな食べ物、納豆 好きな食べ物、美牛の牛丼

勉強は出来る方。だが、テストなどが大の苦手。

普段は出来るのに、なぜかテストになるとダメになってしまった  
め、成績はそんなに高くない

実はかなりのボンボンで、家も凄い豪邸。でも、そのことを隠している

とても友達想いで、優しいやつ。よくチャラ男と勘違いされてしまふ。

能力<sup>スキル</sup> 地質操作 レベルは7

砂、泥、岩、鉱物などの物質を自在に操ることができる

しかし、誠二の場合、腹が減っているとうまく使えないそうだ。

岩・鉱物から、武器などを作れることもある。その場合イメージを詳しくいとうまく出来ない。そして、精神力を激しく消耗するため、何回も、できない

白鷺<sup>しらいざぎ</sup> 真理<sup>まじ</sup>

身長172cm 体重47kg 17歳

守たちの先輩で、白鷺財閥のお嬢様 能適学園3年生

容姿は上の上で、空とは別に、大人な感じが出ている美人系

嫌いな食べ物、特になし 好きな食べ物も、特になし

勉強と成績は、3年連続学年トップ。

狭間世界では、刀等の武器を使用している

家柄・才能等に恵まれて生まれてきた子供

しかし、両親とは幼稚の時にしか会ってなく、両親ともに狭間世界を消すために世界各国を回っていて、常に家では執事とメイドだけだったそうだ。

能力<sup>スキル</sup> 風の操作 レベル9

風を自在に操れることができる。

その気になれば強力な、かまいたちを起こせる。

また、うまく操作をすれば、空もある程度飛べる

二階堂<sup>にかいどう</sup> 真琴<sup>まこと</sup>

身長181cm 体重70kg 17歳

同じく守達の先輩。能適学園3年生

好きなもの 自分より強い奴 妹 嫌いなもの 油っこいもの

成績も優秀で上位の方。記憶力がとても優れている

部活はやってないが、学校外で、ほぼ全ての武道をやっており運動性能は抜群。

基本、狭間世界ではあらゆる武器を全て使用している。

両親は、幼い時に他界。親戚のもとで、三つ下の妹と、お世話になつていたが兄が学園都市に入ると、ともに、妹と一緒に暮らすことになったが、妹が特中に入学することに決まり、中学に入ると同時に別居することになった。

能力<sup>スキル</sup> 物質の具現化能力

自分が思い浮かんだものを生み出せることができる。  
ただし、生ある者や現実に存在しないものなどは無理  
銃器や剣・槍・爆弾等の武器を具現化させ狭間世界で戦っている  
しかし、時間が経つと消滅してしまう。  
誠二とは違い本格的な武器の創造なので、精神力はそこまで消費  
しない

いしがみ じゅうご  
石神 重吾

身長170cm 体重64kg 45歳

能力適用学園の理事長

守達の学園の理事長で、狭間世界を消すためにの研究者。  
昔は、超能力開発と研究をやっていたが、狭間世界の出現で、そ  
ちらに回されてしまった。

能力なし

おかざき すいみ  
岡崎 睡三

身長185cm 体重70kg 26歳

守・空・誠二のクラス担任（男）

いつも眠そうにしている。

担当授業は、体育と能力で、趣味は、ゲームなんでも

好きなもの ゲーム 嫌いなもの 朝・つまらないゲーム

能力 不明

あきは かえで  
秋葉 楓

身長175cm 体重50kg 25歳

学園都市中央警察庁の警部

狭間世界のことを知っており、色々と協力してくれる人。

武器や道具を取り寄せてくれる。

狭間世界で守達が、重症したり、死亡した場合、別の事件に置き換えなくてはならない仕事

能力 なし

しかし、銃の腕前はプロ

---

はさませかい  
狭間世界

数年前に出現した世界。毎日深夜0時に出現する  
神使という化物が存在するし、人の精神と能力を食らう。

出現した原因は、能力開発にあることは、石神や警察も含め白鷺  
財閥は、知っている。

## キャラ紹介 1（後書き）

どうも蜜柑です

意外に長くなってしまったかもしれません。  
すみません

狭間世界での戦いだけでなく、能力者同士の戦いもやっていきたい  
と思います

学園都市第5位 登場（前書き）

どうも、蜜柑です

新キャラ登場しましたが、中二病臭い名前です

能力とかの案はあるんですが、登場のさせ方が難しいです

学園都市第5位 登場

1年F組教室内 PM12:50 4月18日 月曜日

今は昼休みだ。学生にとって最も貴重な時間。飯を食う奴、話をする奴、昼寝する奴。皆色んな事に使っている。今まさに俺は、その貴重な時間を消費して昼寝をしているところだ。

「zzzzzzzzzz・・・」

ガラ

「一宮・・・君で、ここに居る？」

いきなり教室に入ってきて、そんなことを言いながらあたりを見渡し、俺の睡眠を邪魔してきやがった。

「お前が、一宮 守？」

俺の目の前に突っ立っているのは、ネクタイの色が違うから、多分先輩だろう。

「えっと、そうですけど」

入学して間もない俺が、先輩に名前を覚えられるようなことはしていないはずだが・・・

「睡三から聞いたぜ。お前、結構強いんだってな」

「へ？睡三先生が？」あの先生が、俺のことを話してた？生徒くゲムみたいなやつが

いやそんなことではなく、そのことと先輩が何の関係があるんだ？

「俺と一戦やらないか？」

「一戦？つて、戦うってことですか？」

「ああ」

「でも何で、ですか？」

なんで、態々一年の俺なんかと戦おうってんだ？

「俺は、強い相手とやりたいんだ。睡三が言ってんなら、お前は強いはずだ」

睡三が言ったらなんで強いってわかるんだ？俺がその疑問を問う前に先輩が言った

「あの先生は強いからな。そんな人だから見る目はある」

「強い？！あの先生が！？」

「ああ。俺は、勝てる気がしないね」

あの睡三が強い？信じられない！俺は、啞然とした

「それで、どうなんだ？やるのか？やらないのか？」

俺は、ハツと我に返った。それもそうだが、あの睡三が強いなんて信じられない

「えっと」

俺が、断る返事を考えていた時に厄介な奴が話に入ってきた。

「まゝもゝりん！なんの話してんの？」

誠二が食堂から帰って来た。俺が、先輩と何か話してるみたいだったので入って来たようだ

「入ってくんな」

「ひど！・・・てか、こちらの方は？」

「あ、えっと・・・」

そつえば、名前聞いてないぞ

「ああ、すまん。自己紹介がまだだったな、俺は、獅子王ししおう 帝みかどてんだ。よろしく」

「獅子王・・・先輩。どうかで聞いたことあるような？」

誠二が首をかしげながら考え込んでいる。

「えっと、獅子王先輩」

「帝でいい。獅子王は言い難いだろ」

「それじゃ、帝先輩。すみませんが、もうすぐ昼休みも終わるのでまた今度ってことで」

先輩には悪いが今わそんな気分じゃないからな。眠いし

「次は睡三の授業だろ。あいつに、一宮たちを借りるって許可取ったから大丈夫だ」

あの野郎！何許可出してんだ！・・・て、俺たち？

「一宮・東海林・一之瀬の3人だつてよ」

「誠二や空さんも？なんでですか？」

「前に、お前と同じチームで、良いチームプレイだからだそうだ。俺としても、強いほうがいいからな」

なるほど、確かに前の授業の時は、良いチームワークだったと思う。でも

「誠二はいいとして、空さんは良いのかな？」勝手に決めちゃったけど

「ちょ！俺はいいってどういう意味！？」

「どうせ授業受けたくないだろ」

「う、ま・・・まあな」

となると、空さんだな。何て言おうか

「私もいいよ」

後ろを振り向くと空さんが居た。話の一部始終を聞いてたのかわからないが、了解してくれた

「空さん今から何やるか知ってるの？」

「うん、さつき先生に、守君達と模擬戦をやれって言われたからね。第一体育館に行けだってさ」

「そうか。よし！俺は先に行ってるからな」

帝先輩は、嬉しそうに教室を出て行った。

「ねえ守君今の人って」

「帝先輩って言って、俺たちと模擬戦する人」

「帝って！もしかして、獅子王 帝さん！？」

空さんが、顔を近づけながら聞いてきた。

「そ、そうだけど。空さん知ってるの？」

あの人って有名なの？

「知ってるも何も、獅子王 帝さんは学園都市の能力者第5位の人

だよ！レベル10の最強能力者の一人」

「そういえば、そつだよ！まもりんなんでそんな人と戦うの！」

どうやら誠二も思い出したようだ。もう遅いつて感じだけど

「しらねよ！！な、なんでそんな人が俺と！！」

と、兎に角落ち着こう。冷静に、冷静にだ。まずは、あの人の能力<sup>スキル</sup>は、何なのか確かめよう。

「空さん、あの人の能力で何なの？」

どんな能力<sup>スキル</sup>が把握すれば、こちらにも勝機はあるはずだ。

「ごめんなさい、私もよく知らないの」

「そ、そうなんだ。」

結構やばいかもな、能力<sup>スキル</sup>も分からないんじゃ作戦の立てようがない。

「なんだよまもりん。そんなの俺達が速攻で片づければいいじゃんか。前の模擬戦の時みたいに、指揮やってくれよ。まもりん」

誠二は、こういう時に心強い。

「そつだな……。お前の言うとおりだ」

確かに、どんな敵が来たって、先手必勝！速攻で決めれば勝ち目

はあるはずだな

「そつだよ！守君と誠二君が居れば大丈夫だよ！」

「空さん……」

「まあ、俺にかかれば第5位なんて、ちろいけどな！」

誠二よ、空気読め……

能適学園 第一体育館 PM 13:10

体育館に着いて、最初に出迎えたのは睡三だった。

「よ。お前ら、早かったな」

のんきな先生だよ全く、こんな奴が教師もそつだが、第5位が強いって言ってるのが信じられないな

「先生、良いんですか？」

「あ？なにが？」

「何がって……。俺達が、授業を休んで戦うことですよ」

「いいって、良いって。てか、俺も見てみたいし」

「なんですかその理由……」

「つつても、お前達が勝つ確率は半々ってとこかな」

機械の操作をしながら睡三言った。

「それって、どういう意味で・・・」

ブウウウン

睡三に聞こうとした時に、丁度準備が整ったみたいだ

「よし、いいぞお前ら。入れ」

「あ、ハイ」

カプセルに横になろうとした時睡三が言った

「そうそう、相手は帝一人だけだから周りには心配すんなよ」

「え?!」

睡三が信じられないことを言い終わつたと同時に、目の前が明るくなった

バーチャル世界 中央街

この世界に入る時はホントいきなりなんだな

「ここは・・・」

前と違う場所。それも、学園の中じゃない。多分中央街だ

「おい守君」

「まもりーん」

少し離れた所から誠二と空さんの声が聞こえてきた

「誠二、空さん」

今回は結構早く合流できたな

「まもりん、今回は案外簡単かもよ。なんせ、相手は帝先輩だけなんだから」

「でも、第5位だし油断しない方がいいよ」

空さんの言うとおりだ。どんな能力スキルかも分からない状況だ

「ひとまず、作戦を立てよう」

「うん」

「おう」

俺は、この時レベル10の壁を甘く見ていたのかもしれない

バーチャル世界 中央街のとある場所

帝は守達と大分離れたところに出ていた

「さーで、楽しい御遊戯（戦い）の始まりだな」

学園都市第5位 登場（後書き）

どうも蜜柑です

ちよつと早く終わらせてもらいます。すみません

今回は、休み明けか、水曜日にこそうと思います

急いで書いたので、誤字やおかしなところがあるかもしれません。  
すみません

## レベル10の壁（前書き）

どうも蜜柑です

すみません！今回も急いで書いたので、少しおかしいところがあるかもです

今回は、少し短めです

帝さんの、能力はそのうち詳しく説明します。

## レベル10の壁

レベル10の壁。それは、目で確認できる物でも、手で触れる物でもない。でも、確かにそこにあるってことだけは認識できてしまふ。それも、高く、そして厚い壁。「越えられない」「壊せない」誰もがそう思ってしまう。だから、誰もレベル10には敵わないし勝てない

バーチャル世界 中央街 裏路地 守一行

前回とは別で早々に合流できた俺達は、空さんの能力スキルを使って帝先輩の居場所を探り 空さんのもう一つの能力で雷を、帝先輩に落とすというせこい作戦に出ていた

「空さんどう？」

「うん、近くに帝さんの気配は感じるけど、何処に居るかは・・・」

「やっぱ、居場所見つけて、雷落とすなんてそう簡単に行くもんじやないっしょまもりん。」

誠二の言うとおりだ。

仮に先輩を見つけたとしても、簡単に当たってくれる人じゃないだろう。

「しゃーない、俺が囷になるから、そこを誠二と空さんが攻撃してくれ」

「は？それじゃ、まもりんはどうするんだよ？」

「そ、そうだよ。帝さんに捕まったらやられちゃうかもよ」

「大丈夫」

俺は即答した

「なんでだよ！その根拠は？」

「根拠？ないよ？」

「（。A）ポカーン」

誠二よ顔が可笑しいぞ

「勝てる可能性が少しでもあるなら、俺はやる。空さんと誠二はどうなんだ？」

二人とも少し考え込んだが、決まったみたいだ

「確かに、やるなら勝ちたいな」

「そうだね。でも、守君いいの？」

「空さんと誠二は攻撃に特化してるからね、俺が行ったほうがいいんだよ」

「そう・・・でも、気をつけてね」

「うん」

「それじゃ、行こうぜ。まもりん」

バーチャル世界 中央街 中央広場

守は、中央街の中心の広場に居た。誠二と空は周りに隠れている

「さて、ここに居れば来ると思ってたけど。まさか、こんなに早く来るとは思わなかったな」

数メートル先に人影が見えた。

俺達以外には帝先輩しかないので、あれは、帝先輩だろう

俺はさっき空さんから吸収した発電能力で、電気の球体を手に作りだした

（まだだ、まだ射程距離に入っていない）

俺は、手に溜めた電気を構えながら帝先輩が来るのを待っていた

しかし、帝先輩はどういう訳かかかってこない、というよりも、少しも戦う仕草を見せなかった

（何考えてんだあのひと？）

帝先輩との距離が30メートルぐらいになった時、俺は攻撃の合図を出した

「今だ！」俺は、思いっきり先輩目掛けて電気塊を飛ばした

さらに、帝の左右の横から誠二の岩石攻撃と空さんの電撃攻撃が飛んできた

「やった！！勝った！」

確かに避けることも、ままならない状況だ。誰でも勝利を確信する。

そう、俺でもそうだ

ボツシュ

攻撃の全てが帝にあたろうとした直前、攻撃が消し飛んでしまった

「「「なっ！！」」」

予想だにしない出来事に三人は驚愕を隠せなかった

「ククツ、悪いな。お前たちの攻撃は通らないぜ」

無傷。帝は傷一つも、ついてなかった。

「クソ！無効能力者か！でも、それなら、打つ手はある！」

そう、能力だけが効かないのなら、殴って気絶させるまでだ

守は帝の所まで行こうとしたが、動けなかった。

それは、守だけではなく誠二も空も動けなかった。

（な、なんだ。動けない。いや、動いたら殺される）

この時、三人は生命の危機を感じていた。考えていることも同じだった

逃げれない。殺される。食われる。動けない。誰か助けて。怖い。来ないで！

恐怖のあまり幻覚が、見えてきた。とても大きく不気味でこの世の物とは思えない化物

「ハア・・・！ハア・・・！」

三人とも全身から汗が滝のように噴き出してきている。

帝が近づくにつれ、化物がはつきりと見えてき、恐怖感・絶望感も絶頂に達していた

「こんな程度なのか・・・？」

帝が、尋ねても耳に入らないという状況だ

「な・・・何だこれは・・・！？」

守がやっこの思いで話しかけた

「お、お前は骨がある奴だな。じゃあ、勝ったら教えてやるよ」

バタッ　バタッ

誠二と空が地面に倒れこんだ。恐怖のあまり気絶したのだろう

「頑張れ、今回はお前らが全滅しない限り続くからよ。もっと、俺を楽しませてくれよ」

不敵に笑いながら言い放った

「ク・・・ソ・・・」

守も、意識が遠くなって行った。

バタッ

倒れこんだ守を見ながら帝が、残念そうにため息をついた

「睡三の野郎もしかして、見る目落ちたんじゃねーのか？」

「そんなことねーよ」

何処からともなく睡三の声が聞こえてきた。

睡三はバーチャル世界に外からマイクで話しかけていた

「おい！もう終わっただろ！早く元に戻せよ！」

「お前何言つての？」

「はあ？」

「後ろ後ろ」

ガシッ！

「ッ！！」

帝は誰かに後ろから強く腕をつかまれた。

振り返るとそこには、守が立っていた

「ば、馬鹿な！気絶したはずじゃ！」

ギュリ

掴まれた腕は、より強く握られた

「グー！」（クソ。こいつ完全に意識が飛んでいる！これじゃあ、俺の能力も（スキル）効かない）

そう、守はもはや、自意識で動いていな。ただ、帝（敵）を倒すということだけで動いている

『・・・ブツ・・・ド・・・ベ・・・！』

そう呟き、守は拳を思いっきり後ろに引いた

「やめ！！」（おいおい、冗談じゃねーぞ。そんな力でやられたら、バーチャルでも流石に痛・・・）

ズガアアンツ！！

帝の顔面に当たり、風を切るような音を立てて30m先まで帝が吹っ飛んで行った

「クソ・・・な・・・何なん・・・だよ・・・あいつ・・・は・・・」

帝は、立ちあがろうとしたが、力尽き、気絶してしまった

チーム 守 WIN

上空に大きく守達の勝利が示されていた。しかし、それを見上げるものはいなかった

## レベル10の壁（後書き）

書いている途中詰まりましたが、個人的に良い流れになってきました。

これからも、宜しくお願いします！

次回は、日曜日には出したいと思います。

もしかしたら、遅れるかもしれません。

すみません

帝さんは、これから登場させるか迷っています。

何か注文があれば言うてください。できれば、感想も

動き始めた裏（前書き）

どうも蜜柑です

タイトル変えました

遅くなって本当に申し訳ありません！

今回は成るべく長く書いたつもりです  
誤字とかあつたらすみません！

## 動き始めた裏

能適学園 理事長室 P M 3 : 2 0

部屋には、理事長と睡三の二人が部屋のモニターを眺めていた。モニターには、帝と守達の戦いの記録映像が映し出されていた。

「やはり、彼には、別の力があるみたいだね」

「その様ですね。あいつ（守）の能力吸収は、普通に吸収して時間が立つと消えるものじゃないはず」

首を捻りながら理事長が答えた

「そう、吸収能力は他の物を吸収しない限り残り続けるもの、それが時間消滅で、一個限りとは」

「そして、最後に帝を吹っ飛ばした時のあの力。あれは、あの場に誰も持ち合わせていない能力のはず」

「分からないね。けど、それが彼の能力を弱体化させてると思う」

能力の弱体化？と睡三が聞き返した。

「彼には、もう既に何かの能力が吸収されているってことかな。その為、他のを吸収しても直に無くなる」

「つまり、他の能力に満杯にされていて、他の能力を一定の時間しか受け付けない。そして、既に吸収されている能力の方は、何故か

消えない」

理事長は黙って頷いた

「兎も角、様子を見よう。もしかしたら、彼は奴らに狙われるかもしれない。その時は、頼んだよ睡三君」

「分かりました。生徒達には奴らの指一本たりとも触れさせません」

「頼もしいよ」

能適学園 保健室 PM 4：00

「ん・・・ここは」

「お、気が付いたか」

気が付いた時、俺は又してもベットに寝かされていた。違ったのは病院じゃないってことと、隣に居るのが睡三じゃないってことだ。

「帝先輩・・・」

そうか、俺、負けたのか。何が起こったかも分からないまま・・・

「お前何も覚えて無さそうだから言っけどよ、お前たちの勝ちだったぜ」

数秒の沈黙。帝先輩が何を言っているのか、理解できなかった

「はい？」

俺は、呆氣にとられた。どうやら俺は、耳に後遺症があるらしい。未だに幻聴が聞こえる

「聞こえなかったのか？お前たちの勝ちだぞ。もっと喜べ」

「か・・・ち・・・？」

分けが分からなくなった。気絶する寸前までのことは覚えている。なすべがなく、そのまま負けたかと思っていた。でも、勝てたんだ！俺じゃないのは確かだ。誠二か？空さんか？どっちが決めてくれたんだ

「ああ、お前が俺を吹っ飛ばしてな。そのまま俺の負けだ」

やべえ、本格的に耳がヤバイ。

俺が、帝先輩を吹っ飛ばした？・・・どんな幻聴だっつの！

「信じられないようだな。だが事実だ。この俺も流石に恐怖したな」

俺の顔を見て察したのだろう聞き直す前に答えてくれた  
だが、やっぱり信じられない

「そんなのありえないですよ。帝先輩には、俺達能力が効かなかつたし、第一に俺は気絶したはずじゃ！」

「そう、確かにお前は気絶していた。が、無意識化での俺に勝ちたという衝動、それがお前を動かした。と、俺は思う」

「無意識化での衝動……」

以前に俺が誠二に助けられた時と同じ現象か？  
確かにそれなら辻褃合わなくもない。

「まあ、難しい話はまた今度だ。少し休め」

「あ、はい」

そういえば、誠二と空さんはどうしたんだ？

「あの」

「ん？」

帝先輩は保健室のドアを開けて、出でるところだった

「誠二と空さんは大丈夫なんですか？」

「ああ、あの二人なら大丈夫だ。遅くなるとあぶねえから先に帰らせた」

「そうですか。よかった」

「大切な仲間なんだな」

小声で帝は呟いた

「え？今何て言ったんですか？」

「いや、何でもねえ。じゃーな」

ガラガラ

学生寮 1F ロビー PM 6:00

ガチャ

「おー！まもりん！おかえり！大丈夫だったか？」

「守君、大丈夫だった？」

二人とも心配そうに寄って来た

「ありがとう。大丈夫だよ」

まあ、バーチャルだし傷は負わないからな

「いやゝなかなか起きなかったから、心配したぞ」

「心配かけて悪かったな」

「うっん、守君が無事でよかったよ」

ロビーを見渡して、先輩達が居ないのに気が付いた。

普段この時間帯なら、ソファアに座って何かの作業や読書している筈なんだけど

「先輩たちは？」

「ん？ああ、白鷺先輩はさつき用事で、出て行ったけど、二階堂先輩は分かんネ」

「何か用事でもあったの？」

別に用事はなかった。ただ気になっただけである

「て言うか、今思ったんだけど。二階堂先輩ってどんな人なん？」

誠二が、唐突にそんなことを言ってきた。

てか、ホントいきなりだな。少し前の会話が打ち消されたぞ

「え？どんなつて、言われても話したことないし。空さんは」

「うーん、私もあんまり話さないから分からないかな」

意外な答えに、誠二が空さんに聞き返した。

「え……。まもりんなら兎も角、一年以上寮が同じだった空ちゃんも知らんの？」

空さんは、苦笑いしながら答えた

「アハハ……。ごめんね。」

確かに、一年以上も同じ寮ならだったら少しくらいは話すだろう

「なんだか、どーうにもミステリアスな先輩だな」

誠二がいたずら笑みを浮かべ腕を組みながら言った

「何がミステリアスだ。馬鹿かお前？」

というか、馬鹿だな。

「真顔で言うな〜！」

沈黙が少し続いた

「・・・てか、別に良いんじゃない？ 気になるんだったら聞けばいいだろ」

「まゝ、そうなんだけど。何て話しかけたらいいかな？」

「女子かお前！ 兎も角何か話せばいいだろ」

首を傾げながら考え込んでいる誠二。何だかとってもどうでもいい

「俺もう上行くわ。何だか疲れたから寝る」

「また寝るのかよ〜！」

間髪いれずに誠二が突っ込んできた。

「ああ、おやすみ」

「あ、じゃ私も部屋に戻るからじゃあね誠二君。守君もおやすみ」

ロビーには誠二一人だけになった

「うぉーい！？俺の話スルーですか！！てか、一人にすんなや  
ー！！！」

叫んだところで二人とも上に行ってしまった

学園都市 西側 早海町 早海港 PM10:37

暗闇の中、冷たい潮風が吹き荒れている、コンテナの迷路を逃げ  
まどう複数の黒服達。

皆が息を荒立てながら必死に走っていた。

そして、全員の手には、黒光りする金属の塊が、握られている

「クソ！まさか、待ち伏せさせら手たとは！」

「今はそんなことよりも、全力で逃げろ！捕まるなんてことがあれ  
ば終わりだぞ！」

「分かっている！」

数分走り回って、その黒服たちはある倉庫に逃げ込んだ。

「ハア・・・ハア・・・」

「ひ、ひとまずここに隠れていよう」

「ああ、そうなんだ」

束の間の休息。彼らにとってどれだけ有り難いものか

黒服の一人が通信機を取り出した

「こちら、詮索部隊。応答してください」

しかし、通信機からは何の音も聞こえない。

「クツ・・・駄目か」

他の黒服が焦り気味に訪ねてきた

「お、おい！どうするんだよ！」

「そんなの俺にも分かるか！」

他の黒服達もどうしていいか分からず、段々と苛立ちを見せ始めた

と、その時、不意に後ろから声が飛んできた。

「じゃあ、俺たちに大人しく捕まるか、それとも、ここで俺とやり合って捕まるか、どちらかな」

「！！」

後ろの声に驚き振り向いた黒服達は更に驚愕した。  
そこに立っていたのは、まだ高校生位の少年だった。

「な！こ、子供？！」

驚きを隠せない表情になった

「まさか、お前も、『護り人』<sup>ガードナー</sup>か!？」

「それがどうした？」

「こんな子供まで・・・」

「俺には、ちゃんと適性があるからな、それに護る物もある。だから戦う」

黒服の一人が笑って答えた。

「悪いが、我々のも目的がある。子供とて、手加減はしない！」

そう言った途端黒服の全員手に持っていた銃をその少年に構えた

この時黒服達は、勝利を確証していた。

なぜなら、その少年は戦う武器を持っていなかったからだ。

例え能力を使えるとしても、この距離で弾丸が外れるはずがない

「武器を持たないで、のこのこ来るとはな・・・」

余裕の笑みを浮かべ黒服達は引き金を引いた

ドン

いくつかの銃声が鳴り響いた。

誰もが少年の死を確信していた。が、弾丸は少年には当たらなかった。

「なッ!!」

黒服達の目の前に少年を囲むようには大きな壁が現れていて、その壁に弾丸が塞がれていてしまっていた。

壁が消え、嘲笑いながら多数の武器を所持している少年が囲の向こう側から現れた

「ッ！」

黒服達がもう一度撃とうと、引き金を引いたが弾は出なかった

「俺は現実存在する物なら、どんな場所でも、どんな所でも生み出せる。お前たちの銃口に物を詰めらせるなんて、たわいもない」

「そ、そんな」

もはや、黒服達に勝ち目はない。

黒服達はその場に崩れ、啞然としてることしかできなかった

「お前らが、『key<sup>キ</sup>』だってことは分かってるからな。今度は何を企んでいるか話してもらをうか？」

少年が近づいた途端に黒服達全員が、いきなり叫び、地面に倒れもがき始めた。

「があああああ!!ぐっ・・・ぎいやあああ!!」

「な、何だこれは!!」

何が起こったか分からないまま、黒服達は数秒もがき苦しみ血を全身から嘔きだしその場に倒れ込んだ。  
もはや生死を確認するまでもない。

「な、何だ今のは」

全く持つて分けが分からない状況だった。

ピピピピ・・・

少年が啞然としてしていると、自分の持つている通信機が鳴った

「そちらはどうなりましたか？」

「よく分かりませんが、『<sup>キ</sup>key』の連中が・・・死んだ」

溜息混じりに答えが返って来た

「やはり・・・そうですか」

「何か知っているんですか？」

「はい。ですが、今日はもう遅いので詳しいことはまた後日話します。今日はもう帰ってよろしいですよ。後の始末は私たちがやっておきます。」

「了解しました。それでは」

「はい、ご苦労様です。二階堂さん。」

少年は地面に倒れこんでいる死体を再度確認し、さっき顔についた黒服達の血に気づき持っていたハンカチで拭い、その場を後にした

## 動き始めた裏（後書き）

蜜柑です

最近タイトルが思いつきません。

今回のタイトルも後半のこと指してたし分かりにくかったですよ

もう少し話の展開を早くした方がいいですかね？

もしかして、ややこしくなる予感がしてきました。

でも、出来るだけうまくまとめるように努力します

評価など、お願いします！

## 異変発生（前書き）

遅くなつてすみませんでした  
急いで書いたのでおかしい部分もたくさんあると思います。  
すみません

書き方ちよつと変更しました

もし前の方が良かったら言ってください直します。  
何もなかったらこのまま続けます

## 異変発生

学園都市 北西側 寒地町 港付近 狭間世界 4月22日～4月  
23日の狭間

守・空・誠二サイド

「は、はつくしゅ！」

「守君大丈夫？」

空が心配そうに顔を覗き込んできた

「う、うん。まあなんとか。…くしゅ！」

「（あゝ。早く終わってほしい）」

悴む手を擦りながら守はそんなことを考えていた

学園都市内で最も寒い町それが寒地町。

真夏でも最高気温20 前後で基準気温7、冬場は-30 越え  
何て事もある。

そんな秘境の土地に、部活グループのメンバーが来ていた。  
ことの始まりは、二日前の異変が原因だった

丁度、守が帝に負けた後日グループから異変は起きていた  
そして、異変解決のため部活が動いたのだ

...

寮 5F 作戦室 PM 9:00 数時間前

ガチャ

「失礼します」

部屋の扉を開けて入って来たのは秋葉楓だった  
部屋には、部活のメンバーグループが既に居た

「よし、皆揃ったね。それじゃ始めようか」

理事長が座っていた椅子から立ち傍にあったりモコンのスイッチを押した

ピツという機械音が鳴り作戦室にあったモニターに映像が映し出された

映像にはここ最近に起きた事件のデータが映し出された  
事件と言うのは、殺人などではないがそれに近い物だった

## 寒地町廃人多発生現象事件

モニターの上の方にそう示されていた。

「皆も知ってるかもしれないけど、昨日と一昨日学園都市内の寒地町で廃人が多発生した事件だよ」

「はい、ニュースにもなっていましたよね。路上で何人もの人が倒れていて、皆が廃人になっていたって言う」

空がそう言い、理事長が頷き話を進めた

「この事件はやはり神使に因るものと判断していいだろう。しかも、今までにない敵の行動だ」

今までにない行動とは？と、秋葉が尋ねた

「今回のように一日二日で多くの被害者が出た例がないんだよ。普段なら最高でもひと月に2〜3の人数だった。それに襲われない月もあった。だけど、今回に限って……」

「被害者が急増……ですか。でも、なぜですか？神使が急増したわけでもない。もし急激な増え方をしていたのならこちら側のセンサーにも引っ掛かるはずなのでは？」

眉間にしわを寄せながら理事長が答えた

「どうやら、新手の敵みたいだね。それも複数か大型の神使だ」

作戦室に居た全員が驚きを隠せなかった

「大型ってことは、前に誠二がここを襲ってきた時のようなやつな

んですか?!」

今まで静かだった二階堂がどこかそわそわしながら聞いた

「まだ、大型とは決まってるじゃないけど、もしそうだとするとその可能性が高いね」

「では、一刻も早く手を打たなければなりませんね理事長」

白鷺が座っていた椅子から立ち上がりながら理事長の方を向きながら言った

「すまないが頼んだよ。白鷺君」

分かりました。と白鷺が言い後ろの本棚の近くに向かった

「あれ?何処行くんですか?白鷺先輩」

「君たちは、外での戦闘は初めてだろう。能力が有るからって武器も無しじゃ心もたないだろ」

と、言い終わると同時に、『ピッ』という機械音がまた鳴ったと思っ  
たら本棚が横にスライドし、その後ろから数多くの武器が出てきた

「「な!!!ええええええ!!!」」

勿論のこと守と誠二は驚愕した。何せ映画でしか見たことのないシ  
チュエーションだったのだから

空は見慣れていたのか驚きはしなかった

「好きな物を選んでくれ。それと取り扱いには注意してくれ」

「ちゅ、注意って触ったことないですよ！」

「何だ？ないのか？」

「あ、当たり前っすよ！」

白鷺が自分たちより少しずつれて要ることを初めて認識した二人だった

「では、射撃場で練習しましょうか」

と、秋葉が二人に言った

「射撃場！此処そんな所あるんですか！」

「はい、地下にあります。ただしカードキーが必要なので私か理事長の許可がないと開けません」

もはや何でもありだった。守も誠二も呆氣にとられるぐらいだった

「それでは、一宮達が終わり次第出発とする。真琴も一之瀬も十分に準備していてくれ」

二人が返事を返しその場は解散となった。  
部屋には秋葉・守・誠二の三人だけとなった

「それでは、私たちも行きますか」

「あ、はい」

「りよ、了解つす」

・ ・ ・ ・ ・

学園都市    北西側    寒地町    港付近    狭間時間    現在

守・空・誠二サイド

「くしゅ！」

狭間時間内でも気温は通常時と変わらないようだ  
寒がりの守にとっては最悪だろう

「風邪引くなよ。まもりん」

「わかってるよ」

現在、部活グループのメンバーたちは二手に分かれて神使を捜しに回っている  
守・空・誠二のチームと白鷺・二階堂・秋葉のチームの二組だ  
守チームは空の千里眼で、白鷺チームは機器と白鷺は能力を使い上  
空で捜している

「先輩達見つかったかな？」

歩きながら不意に空が心配そうな声を漏らした

「まあ、大丈夫何じゃないかな？先輩たちだし」

「そうだよ。なんせ、能力の応用空まで飛べるんだから」

「そう…だよな」

数秒の沈黙の後空が突然声を上げた

「あ！」

「「え！な、何！」」

「見つけた…」

「え？」

「いた！見つけたよ！」

数メートル先の倉庫を指さしながら言った

見つけたというのが神使を指していることは二人も百も承知であった

「そ、それじゃ、早く先輩たちに連ら…」

ゴワァ！！という何かが崩れる音が響いた

数メートル先にあつた倉庫と思われる建物が完璧に破壊されていたが、守達はそんなもの目に入つてなかつた崩れた建物から飛び出ている巨大な生物

10メートル程の大きさの狼みたいな生物。だが決してその生物は狼なんて言葉でかたづけられない生き物。全身が腐りかけ表面の皮膚のような物が下に落ちた。

その皮膚からも全身からも発せられる異臭がここまで届いている。しかも、その周りには黒いドロドロとした球体が不気味に浮遊している。

突然の轟音。

その生物が口を開け都市全体に響くかのような凄まじい叫び。それは数秒続いた

「ッ！」

叫びが終わつたかと思うと、その生物は目の前に居た。というよりも、目の前まで来ていた

一瞬にして間を詰められていた。敵との距離およそ3メートル

避け切れない。

守達は死を確信した。

## 異変発生（後書き）

どうも蜜柑です

ちよつと、今回分け分からなくなりそうな予感・・・

色々後で書き直すかもしれません。すみません

## 失敗（前書き）

どうも蜜柑です

11月は出さないって言ってたんですけど、途中までか言っていたので、個人的に早く出したかったので出すことにしました。すみません！

新しく書き始めた「デスティニー・ライフ」の方も出来ればよろしくお願いします！！

## 失敗

一瞬。一瞬だった

ボツシャ！と、生々しい音があたり一面に響いた。  
それと同時に、何かの液体が飛び散ったかのような音

ただ、呆気にとられたただだった。

赤黒い液体が中に飛び散っている背景  
全身が震えだす程の寒さ  
信じられないほどの異臭  
圧倒的な状況

その全てを無視して、この場で一番の存在感を放っていた。少なくとも守はそう感じていただろう

ゴワァ！と、神使の数十メートル横にあった倉庫が何かに勢いよくぶつかったみたいに崩れている。  
土煙が上がっていてよく分からなかったが、さっきの化物（神使）が倒れているのが少しだけ見えた

「あまり手荒な事をして欲しくないのだがな・・・」

そこに立っていたのは、

背中に暴風の翼の様なものを二枚纏い、手には豪く鋭い太刀を持ち、この場に一瞬にして現れ、神使を一瞬にして数十メートルふっ飛ばす程の力を持ち。

優雅で圧倒的な存在感を放っているそんな人物

「「「し、白鷺先輩！」「」」

圧倒的状态からの打破。奇跡と言って言い程のタイミング  
うまさすぎる演出にツッコミも忘れてしまう

「遅くなつてすまない。皆怪我はないか？」

「おおよよ」。白鷺せんぱーい」

誠二が噓泣きしながら抱きつこうとしたのを白鷺は華麗にかわした

「誠二は大丈夫なようですよ」

「そのようだな」

「誠二君……」

その場に居た全員が呆れた顔になっていた

「じよ、冗談すよ。そんな皆して、そんな顔しないでくださいよ」

白鷺が誠二に対して溜息をつきながら、

「皆、無事で何よりだ」

守が安堵しながら、

「それにしても、流石ですね。一瞬で倒しちゃうなんて」

「いや、あの分では多ぶ……」

ガラゴガと

白鷺が何かを言い終わる前に後ろから物音が聞こえた

「やはりな」

土煙の中から胴体と首が今にも千切れそうな切断部。  
先ほど白鷺が飛ばした神使である。

「うわぁ……」

「グロいつす……」

「少し甘く見すぎたな。見た目の割には、結構頑丈じゃないか」

微かに笑みを浮かべながら白鷺が言った

「どうしますか？」

と、空が心配そうに尋ねた

「無論。……このまま切り裂く！」

持っていた豪く長く鋭い刀を構えた時だった

ブチャ ベチャ

と、何か粘着質の物が取りついたかのような気味の悪い音が鳴った

「な、なんだ!？」

動揺しながら白鷺は崩れた構えを直した

その音の正体は、先ほど神使の周りに浮かんでいた黒いドロドロとした球体だった。

その球体が神使の体の傷に張り付いた音だった。

すると、徐々に先ほど白鷺が着けた傷が見る見ると治っていき  
たった数秒で、傷が完治してしまいそうな勢いだ。

「なるほど、随分と厄介な敵だな」

白鷺が苦笑いした

「再生すんのかよ！せっけー」

「これは、一筋縄じゃ行きませんね」

「白鷺先輩どうします？！」

焦りを見せている守達と違って、白鷺は落ち着きながら、

「二手に分かれて、左右で攻める。一之瀬は私は左を。一宮と東海  
林は奴の右を頼む。私が合図を出したら一斉に攻撃だ」

「分かりました」

「りよ、了解です」

「任せてくださいっすよ！」

回復中の神使は、見事に無防備の状態。即座に守達は別れ、追撃の

準備に入った

下手に攻撃しても、また治されてしまつては意味が無いことは言うまでもないだから…

「一撃で決める」白鷺は小さくそう呟いた

傷が完治する瞬間。その時敵が最も油断する瞬間  
その時が攻撃のチャンス

「まだ、まだだ・・・」

その時、黒いドロドロとした液体が離れようとしていた。

「！！・・・今だ！！」

轟音

凄まじい轟音と共に、守・誠二・空・真理の攻撃が一斉に放たれた

守は、空から取った電撃で

誠二は、岩石を操り、飛ばし

空も、持ち前の能力で1億ボルトの電撃槍を

そして、真理は凄まじい暴風の渦を放った

神使は、電撃の閃光で見えなかったが、生死など確認するまでも無かった

そして、最後には鼓膜を叩きつけるような爆発が起こった

「や、やったのか？」

「分からない」

最後の爆発で土や砂の粉塵が上がり確認できない

「ど、どうでしょう」

「・・・・・・」

その場に居た全員の緊張は解かれなかった。

手応えは確かにあった。だが、何故か違和感があった。

当たった。あれは当たったはず

皆がそう思い込んでいた。まさにその時だった

粉塵の隙間から覗かせたのは、巨大な黒く細い壁？の様なもの  
神使の姿は無かった。いや、隠されていた

白鷺は直感し。そして、絶望した

「（かわされた。いや、塞がれた。あの攻撃を・・・・！）」

攻撃の瞬間、神使は周りの球体を自分の周りに壁として作り上げたのだ。しかも真正面から受ける壁ではなく、左右の攻撃を受け流すような作りの壁。強いて言えば菱形の様な作り

「クッ・・・・・・どうする！」

打つ手なし

能力を大幅に使い体力の消耗も激しい。

二度目を撃つには時間を開けなければこちらが倒れてしまう

切羽詰まった状況。傍から見れば最悪の状況

だが、この瞬間に部活グループの勝利は確定した  
数メートル先、空達からは右。守達からは左。そして神使からは正面の方にいる人物

「惜しかったな、真理。・・・後は俺達が引き受ける！」

発信器から聞きなれた声が発せられた。

「ま・・・！」

「「「真琴（先輩）！！」」」

## 失敗（後書き）

蜜柑です

「今回長いな！」と個人的に思います

もし、読みづらかったら申し訳ありません！

しかも、なんか中途半端な終わり方してすみません！

次回はいつになるかちょっと分かりません。

成るべく早く出そうと思いますが、今月はこの作品では出さないと  
思います

書いている時にどうやって表現したらいいか苦戦しました…

## 銃弾の豪雨（前書き）

11月は出さないとか言っておきながら出しちゃってますね。すみません！

12月と言うか、冬休みからは本気を出したいと思います！！  
どうか見ていて下さる方々は、お付き合いお願いします！

## 銃弾の豪雨

「一気に決めるぞ！そこから離れる！」

4人は小型通信機から発せられた真琴の声を聞き即座にその場を離れ、近くに建っている倉庫の横にと避難した

「……新型の連射型自動狙撃砲を具現化」

そう真琴が呟くと、周りに……正確には神使を正面からとり囲むように超大口径の狙撃砲が20機程展開され、銃口が全て神使に向けられ、そして

「集中砲火だ！」

真琴の声と共に銃弾が発砲され先程よりも凄まじい轟音と共に銃弾の豪雨が神使に降りかかった

鼓膜が本気で破れるくらいの轟音。耳を塞いでも聞こえてきそうなほどだ。

弾と弾がぶつかり、軌道が逸れた弾が下の地面に当たり、引き剥がすかのようにコンクリートに穴をあけた。

怪物のような破壊力を持った兵器。そんな兵器を見て真琴はくだならそうに言った

「足りないな……全然足りない。こんなのが新型か……」

ガチッ    ガチッ    ガチンッ

と、全ての機器から弾が打ち終わった音がした  
弾数にして凡そ30万発。数百発は外れて標的には中らなかつただ  
ろつが、それでも凄まじい量の弾数が神使に中つたはずだ

神使の地面が抉られたかのように滅茶苦茶になっていた。  
しかし、

「結構頑丈だな」

そこには形は変わっていたがまだ確かにそこに在った。  
神使を包む様に作られた球体型の壁。銃撃を受けた所が所々へっ込  
んでいる

「だが、まあ予想通りだな」

そう呟きながら右手をゆつくりと上げると同時に

「今です！秋葉さん！」

ドガガガガ！！

と、神使の壁を的確に一点だけを狙った正確な連射狙撃

真琴より300メートル程後ろ

特殊ライフルを装備して、攻撃瞬間を待っていた秋葉楓によるものだ

「貫通性に優れた特殊弾は流石に聞いたようだな」

真琴から見て、神使の壁の中心に40？程の穴がぽっかりと空いて  
いた

「まあ、最も反動が激しすぎて連射なんて出来ない筈なんですけど……。流石ですね……」

等と適当な感想を呟きながら今度は筒状な物を生み出した

「何にせ、よこれで終わりだな」

続けて真琴は最新型のロケットランチャーの引き金を引きながら嘲るように言った

「自分で作った壁で自分の逃げ道を塞ぐとは何とまあ……。哀れだな」

発射された数発の弾が無慈悲に穴の中へと入っていき、盛大に爆発した。

中は激しい業火のようになり熱気が遠くまで届く勢いだった

撃った弾はライフル弾と同じく特殊な作りで、爆発すると物体の燃焼速度上げる液体がかかる仕組みになっている。

「勿論のこと内部で爆発した訳だから、液体は残らず神使に降り注ぐってわけだ」

と、独り言を呟きながら守達の場所へと向かった

（数分後）

帰宅途中 4月23日 土曜日 AM0:30

神使を討伐に成功し、後の処理などは秋葉の仕事ということで、守達は寮にと向かった

「いやゝ凄かったつすよ！真琴先輩！」

「いや、そうでもないさ」

「またまたゝ、謙遜しちゃってゝ」

興奮気味に誠二が真琴に話し、その少し後ろで真理・空・守が歩いていた。

「マジで凄かったすよ！白鷺先輩は何て言うか、こっ……華麗な感じだったんですけど、真琴先輩は神々しさみたいな感じですよ！登場の仕方とか仕込んでたのかー！と言っちゃいそうなほどタイミングがピッタリでしたもん！」

「そ、そうか」

「そうですよ！あと後あの時のアレも……」

誠二の勢いに押され気味のようだ

そんな光景を後ろから見ていた守は呆れながら話した

「何て言うか、誠二はもう少し他人の心を読めるようになってほしいですね……」

「フフ、まあ良いじゃないか。真琴も満更でもなさそうだしな」

微笑みながら真理は答えた

「そうですか？空さんもそう思う？」

「うん。真琴先輩楽しそうだよ」

「楽し…そう？」

自分の思っている楽しいそうという定義を頭で再確認し、再び真琴を見歸しやや困り気味に誠二を対応している姿を見て、

「楽しそう…ね…」

「ああ」

「うん」

溜息をつきながら思った

「（……間違ってる俺だけ？）」

## 銃弾の豪雨（後書き）

デステイニー・ライフの方出したの少し失敗かもしれませんが…

ホント言うと、勢いで書きちゃったものなんです。

大幅に内容を変更して出そうと思います。と言っても、まだ話の序盤も序盤なんで少しだけ変えるだけかもしれません。

本当にすみません！あと、タイトルとジャンルを変えようと思います。

暗部組織 0 (前書き)

今回は、これから始まる物語の少し前の話

## 暗部組織 0

??? 4月24日 日曜日 AM10:46

学園都市内のある雑貨店デパートの地下の隠しエレベーターを使い、数百メートルの地下

一般人なら普通は訪れないであろう学園都市の暗部組織用の小基地。ハイテク機器などがズラリと配置されており、それを息をするように操作している者が居た

「えつとー、ここがこうで、これがあそで、これは……何処だ？」

年齢は凡そ14〜15歳の少女。少女の現在のスタイルは半裸体に近い格好をし、所々には、周りの機器から伸びている電極が付いていて、頭には輪のように頭全体を覆うような機器が装着されており、そこにはケーブルやプラグが繋がっていた。

淡々と電子コードやプラグを周りの機器や頭の機器に指しこみ、それと同時にPCを操作している。

作業に疲れたのか頭の機器を外しその場に置き横になった

「だー！！疲れたっての！もう、先輩マジ手伝ってくださいっすよ〜！」

先輩と声をかけた先には高級な椅子に座り足を机の上に置きながら情眠をしていた

「先輩聞いてんですか〜。ありえないっすよー！こんなか弱い少女一人に任せるなんて」

「何がか弱いだ。てか、それでも俺は仕事をしてるんだよ」

「どんなつすか?!ただ寝てるだけでしょうが!」

予想にもしない返答でその場に勢いよく立ちあがった

「寝るのも人間としての仕事の一つなんだよ」

うがー!と言ってその少女はその場にくずれた。もはや少女には動く気力が無かった。なので、

「じゃあ、私も寝ますからね!」

「それはだめ」

「何でつすか!?!」

「仕事が進まないでしょー?」

「じゃあ、なおさら手伝ってくださいよ!」

「ZZZZ……」

「寝るなー!」

??? 同時刻 場所不明

そこは、なにも無い部屋だった。いや、違う。何も無いが特徴的な場所であつた。

一面が白で覆われ、何処まで続いて要るか分からないほどの大きさの部屋。上下左右のない部屋。言ってしまうは無重力空間だ。家具などは勿論ないが扉だけが中に浮かんでいた。

そんな部屋に二人の人物が居た。

片方はスーツを綺麗に着こなした紳士。片や制服で着崩しているがそれが様になっている青年

両者とも部屋の色とは反対に黒の服を着込んでいた。

「二階堂 真琴」

「あ？」

空中で転寝していた青年が不機嫌そうに眼を覚ました

「4月18日。我々の部下がお世話になった人物だよ」

「あ？……あー、そんな名前だったけか？そいつかどうかしたのか？」

「いや、別に何も……。ただ、その人物が所属している組織の事で」

青年はめんどくさそうに暫く考え込んだ後に口を開いた

「確か、護り人<sup>ガードナー</sup>だったけか？」

「いや、そちらではない、もう一つの方だ」

「もう一つ？……あ、あー。あれか、何だっけ？部活<sup>グループ</sup>だったけか？あつちはただの正義ごっこだろうが。気にする事でもあんのか？」

「確証は無いがメンバーの一人に自然適用者が居るらしい」

今まで詰らなさそうに聞いていた青年が体の体勢を直し聞き返した。

「自然適応者だと？」

「確証はないがな。それと不可解な点がまだある」

「不可解な点？」

「確かに、部活<sup>グループ</sup>は清掃係のようなものだ。だがしかし、あれ程の戦力を何故そちらに回したのかが理解できない」

「二階堂、それと白鷺財閥の令嬢だったか？」

スーツの男は黙って頷き話を続けた

「二階堂。それと、白鷺。両者ともレベルは9この時点で小組織のリーダー格に慣れる素質が在るにもかかわらづ……」

「清掃員……」

「だが、二階堂だけは護り人に務めている。しかも、どうやら部活グループのメンバーには、内密らしい」

それを聞いた青年は笑みを浮かべた。これから始まるうとしているゲームを楽しむかのように。不気味で悪意に満ちた笑み

「イイね。最高に楽しくなりそうじゃんかア」

「動くのか？」

「ああ……ちつとばかり早いお祭りだ。最近動いてなかったからなあ。派手にやろうぜエ！」

「了解を得なくていいのか？」

「良いんだよ。何時も通り命令が無い限りは自己判断で自己責任だ。……さあゝて行くかア。手土産は実験材料つてな」

「では、私は自然適応者の方を、お前は二階堂の方を」

扉を開けながら青年は聞いた

「んで、そいつの居場所は？」

男は答える

「こちらに情報によると今は南西の方に居るらしい」

「オッケー！ 久々の運動だ。はしゃいじゃうかもなア！」

---

学園都市 南西側 満開町 とある屋敷内

常に花が満開になっている町。

花見などは冬場以外全ての季節で行える。夢のような町  
そんな町の敷地の半部私有している財閥が在った。  
白鷺財閥との関わりも深い財閥である

その屋敷内で一人の女性が不機嫌そうな顔になっていた

「はぁ……」

「どうなされましたか、お嬢様」

深い溜め息を吐いた主にメイドが心配そうに尋ねた

「どうもまた騒がしい事になりそうだわ……」

「どうなさいますでしょうか？」

「放って置くのもなんだし……。そうね、軽く潰してきてくれない  
かしら？」

満面の笑みでそうメイドに伝え、メイドはお辞儀をし、答えた

「畏まりましたお嬢様」

「どうも有り難う、感謝するは。あ、どうせなら、あのお方に連絡  
しておきますので、一緒にやって来てはいいかがかしら？その方が早  
く進むでしょう？」

「感謝いたします」

「いい土産話を期待しているわ」

暗部組織 0 (後書き)

ややこしくなるかもしれません。

夜中に書いたからテンションがおかしくなっています

誤字があつたら教えて下さい

## 暗部組織 1

学生寮 1F ロビー AM10:30

学生の休日つてのは学生生活を充実している奴意外、全くつて言っていないほどやる事が無い。

ましてや、部活やクラブ、委員会等に入っていない奴なんて、なおさらだ。

そして、その条件に当てはまる人物がここの学生寮に居た。

「……暇だ」

ロビーで小説を読んでいた守は、読んでいた小説を横のテーブルに置き、一人呟いた。

今、この学生寮に居るのは、守だけだった。

白鷺は家の用事で、空は部活で、二階堂は朝から見かけておらず、唯一同類だと思っていた誠二も何かの用事とかで外出していた。

「（先輩方と空さんなら兎も角、まさか誠二までとは）」

等と考えながら時計を見た。

時刻は10時31分を指していた。

「散歩でも行くか」

別に行くあては無かった。ただ自分だけが何もしないで、折角の休日を無駄に過ごすのが気に食わなかった誰だ。と言うか、同類と思っていた誠二すら出かけているのに、自分がこの場に居つづけるのは聊か腹が立つからだ。

「行つてきまゝす」

と、寮の玄関ドアを開けながら、誰もいない寮に背を向けながら出て行った

???  
デパート 雑貨屋最地下の隠し部屋 AM10:53

その部屋には、だらけながら作業をしている少年と、少し不機嫌気味に、黙々と何かしらの作業をしている少女が居た。会話は無く、部屋は静まり返っていた

ピピピピピ

と、部屋の静寂を破る単調な音が鳴り響いた。その音の正体は小型の通信機

その通信に出たのは、少年の方だった

「はい、博士ですか？どうかしたんですか？」

と、少年は軽薄な口調で話し始め、通信相手の『博士』と言う人物が話を始めた

『仕事が出来たみたいだ。資料を送るから確認してくれ』

言ったと同時に横にあったPCに何らかの資料が送られてきた。

「こっちも忙しいんですけど。つばきーに至っては戦闘なんてできないし」

「悪かったですね！」

間髪いれずに、前で作業をしている少女怒鳴りながら答えた

『あまね  
天音をそちらに向かわせた。お前と天音で片づけてくれ』

「天音ちゃんあまねが来てくれるんですか?!」

「いや、だから、お前も忙しいんだって。……てか、天音がやるなら一人で十分じゃないですか」

博士は鼻で笑い、答えた

『確かにな。……しかし今回は君の知人が関係しているのだよ。それでもいいのかね?』

「何?」

横のPCに表示されている資料を今初めて確認し、その資料の内容に対し、博士に怒鳴りながら尋ねた

「一体どういう事だ?!」

想像通りの反応で微かに笑った

『それは、私には分からないね。……ただ、その子はどうも変わった力の持ち主の様じゃないか』

「……!」

『それに、お前だってこのまま隠し通せるなんて思っていないだろう。これはお前の為でもあるのだよ』

少年は、僅かに眉をひそめた

『そう言う訳だ。後は其方に任せた』

ピツと、通信が終わり、少年は思わず溜め息をついた

「先輩。……どうします?」

少女が心配そうに尋ね、それに対し冷静に口調で答えた

「行くしかないだろう。悔しいが、奴の言う通りだ」

「……ですよね」

「行く前に、少しばかりメンテナンスをする」と、椅子から立ち上がり少女に向かって言った

少女は黙って頷き、そこから立ち上がり別の機器の場所へと移動し操作を始めた

「まさか、こんなにも早く狙われるとわな」PCに出ている画像を見ながら顔を顰めた

「一宮守、……いや、『まもりん』」

学園都市 中央街 街外れの路地裏 AM11:05

中央街の賑やかな通りとは違い、治安が行きとどいていない街外れに今、守は居た  
散歩など出来たわけではない。ましてや、ここに用事が在ったわけでもない

「ハッ……ハア……ンッ」

守は息を荒立て、今にも倒れそうなほど疲労していた。運動等では無い、生命の危機に体が反応し逃げている最中なのだ。

「この辺りに居るのは分かっているんですよ。早く出てきて下さい」

何処からともなく襲撃者の声が聞こえて、守は恐怖した。

何故自分が狙われる？という疑問も抱けぬまま逃げるのに必死だった。

捕まれば殺される。かと言って、逃げ切れるとも思えない。

近くにあったごみ箱の物陰に入り身を縮めた

くそ……クソ！……畜生！何なんだ！

無意識に声が出てしまった。それ程理解しがたい。ただ散歩に来ただけだ、それだけで命が狙われる？

普通に考えればもっとほかの予想が出来る筈だが今の状況は普通では無かった。

そして、後ろから今一番聞きたくない声がこちらに聞こえてきた

「30分だ。30分でお前は身動きも儘ままならない体になる。私としてはどちらでも良いのだが、どうせ捕まるのだから無駄な事はやらない方がいいのではないか」

ダダダダッ

と、言い終わると同時に相手の手から光る弾が発射された

こちらに向かってくる多数の弾。それに反応できたのはまぐれである

「……！！」

守が瞬時にその場を離れ横の細道に逃げだしたが、外れた弾がその場を吹き飛ばし、その爆風が守を襲った。

「ガッ！ああああ！！」

爆風の煽りを受け、守は5メートル以上をノーバンで吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

守は何とか立ち上がり壁を伝い足を引きずりながらも、今出せる力を使い歩き始めた

爆風の被害を受けたのは守だけでは無かった。撃った相手も同様だった。しかし、傷は受けておらず、爆風で舞い上がった粉塵で目標を一時的に見失ってしまっただけであった

「やはり、壁が在ると厄介ですね。余裕を持たず決めますか。……  
それでは、攻撃方式を変更させていただきます」

男は焦りはせず、冷静な口調で言い、目標が逃げたであろう道をゆっくりと歩き始めた。

## 暗部組織 1（後書き）

ちびちび書いてます。

長くなるかもしれませんが、お付き合いしてくれたら嬉しいです

そしてもう、後戻りできない感じになっちゃいました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0736w/>

---

超能力学園

2011年12月3日20時58分発行